

---

# チェネレントラ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チエネレントラ

### 【Nコード】

N3460F

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

継父や姉達に冷遇されているチエネレントラ。ところが彼女の優しさと聡明さを見抜いた老人により忽ち豪華なドレスを貸され王子の前に連れられて。ロツシー二版シンデレラを小説仕立てにしました。

こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

## 第一幕その一

### 第一幕 邸宅にて

大きいが随分古い家があった。どうやらかつては立派な邸宅であったようだが今ではその面影を残すのみである。櫛の木の扉も何か古ぼけている。一見では幽霊屋敷に見えなくもない。とにかく古い家であった。

だが中には人がいた。そこでは二人の年頃の少女の声がしていた。  
「ステップはこうよ」

「いえ、こう」

見れば二人の少女がステップを踏みながら話をしている。暖炉の前で身体を軽快に動かしながら話をしている。赤い髪の少女と茶色の髪の少女だ。二人共顔は中の上といったところか。悪くはないが特にいいというわけでもない。ありふれた顔といえそうなる。

服はわりかし華やかである。それを見るとこの二人が一応身分のある家の者であることがわかる。だが今一つ気品といったものがない。二人共どちらかというとコメディアンに近い雰囲気であった。顔からではなくその仕草や言葉がそうなのであった。

「ティズベ、それは違うわ」

赤い髪の少女が茶色の髪の少女に言う。

「ステップはこうなの」

そしてステップを踏む。だが名を呼ばれた茶色の髪の少女は顔をムツとさせて赤い髪の少女に反論する。

「クロリンダ姉さん、違うのは姉さんよ」

彼女もステップを踏む。見ればそれぞれ動きが微妙に異なっている。妹の方が軽やかだが姉の方が優雅だ。年の差であろうか。

「こうなのよ」

「だから違うって」

二人はそんな話をしている。その後ろの暖炉を掃除する一人の少

女がいた。灰にまみれ粗末な服を着ている。金色の髪も灰にまみれているが波がかり元は美しいのがわかる。その顔も化粧気がなく灰に汚れているがやはり整っている。とりわけ青い瞳が美しい。

「昔一人の王様がおられました」

彼女は歌を唄っていた。やや低めの声である。低いとその声自体は綺麗で軽やかであった。

「王様はお姫様を探しておられました。ご自身で探され三人の姉妹の中から一人の少女を選びました」

彼女は掃除をしながら歌を続ける。歌は軽やかに流れている。

「贅沢がお嫌いな王様は純真で清らかな娘を選びました。そして二人で何時までも幸せに暮らしました」

「ちよつとチエネントラ」

二人の少女はその灰を被った少女に顔を向けた。

「その唄の他に何かないの？もう聴き飽きたわ」

「そうよ。あんたはその唄が好きみたいだけれどね。あたし達はあんまり好きじゃないのよ」

「けれど私は」

チエネレントラと呼ばれたその少女は二人の声を受けてゆつくりと顔を上げた。

「この唄が一番好きだから」

「だから唄うのね。やれやれ」

「他の唄覚えたら？何か明るいのがいいわ」

「けれど私は姉さん達と違って」

「末っ子だから、っていうのはなしよ」

クロリンドがここでこう言った。

「それとこれとは関係ないわよ、唄とは」

ティズベも続く。二人共不機嫌を露わにしていた。そして妹に対して言葉を続ける。

「大体あんたが家事をやるのも仕方ないでしょ、末っ子なんだし」

「それもお義母様の連れ子だったんだし。それでも家に置いてもら

っているんだから文句言わない」

「はい」

チエネレントラは姉達にそう言われ仕方なく俯いた。

「それにあたし達が王子様と結婚できたらあんたにもいいことがあるのよ。それはわかつてるでしょ」

「そうそう、あんたも王妃様の妹君、それは忘れないでね」

「はい」

やはり力なく頭を垂れる。ここで玄関の扉をノックする音が聞こえてきた。

「あら、誰かしら」

「チエネレントラ、出て」

「はい」

チエネレントラは姉達に言われて出る。見れば貧しい身なりの老人であった。

「あの」

「何でしょうか」

チエネレントラはその老人に尋ねた。別に侮蔑の目で見てなどはいなかった。

「お恵みを」

「あ、駄目よチエネレントラ」

二人の姉が後ろから言った。

「うちにはあまり余裕ないから。いいわね」

「けど」

「どうしてもっていうんならあんたの渡しなさいよ、いいわね」

「わかった？」

「ええ」

彼女は頷くとまず自分の部屋に戻った。そして一杯のコーヒーと一片のパンを持って来るとその老人に手渡した。

「少ないですがこれを」

そしてそのパンとコーヒーを手渡した。老人はそれを受け取ると

チエネレントラを驚きと喜びの顔で見た。

「本当に宜しいのですか？」

「はい」

彼女は頷いて答えた。

「是非お食べ下さい」

「それでは」

彼はそのパンとコーヒーを食べ、飲みはじめた。そしてコーヒーカップを彼女に返した。

「有難うございます。おかげで助かりました」

「いえ、いいです。御礼なんて」

だがチエネレントラは微笑んでそう言った。

「困っておられる方をお助けするのは当然ですから」

「そうですか。何とお優しい」

老人は感動したような声を漏らした。しかしここでまた後ろの姉達と言った。

「チエネレントラ、私達も困っているんだけど」

「ちよつとドレス持って来て」

「あ、はい」

それを受けて衣装部屋に向かう。扉は閉められ老人は何処かへ消えたと思われた。その時であった。

派手な行進曲が流れてきた。そしてそれは家の前で止まった。それから玄関の扉が開けられ大勢の制服を着た者達が入って来た。

「ドン」マニフィコ様のお屋敷はここでしょうか？」

先頭にいる一際大きな男が言った。

「あ、はい」

「そうですけど」

二人の姉が出て来た。そしてその大きな男に恭しく頭を垂れた。

「ようこそ、我が屋敷に」

「はい」

大男も頭を垂れた。

## 第一幕その二

「この我等が王子ドン・ラミー口様がお妃様を探しておられます」

「はい、それは御聞きしております」

「その花嫁候補を選ぶ舞踏会を王宮で開くことになりました。それで皆様を王宮へご招待することになりました」

「まあ、それは」

「何という幸せ」

いささか儀礼的な喜びの声であつた。貴族社会に付き物と言えばそれまでであるが。

「皆様にはその舞踏会で歌って踊って頂きます。その中でとりわけ美しい方が王子様の花嫁、そして将来の王妃様となられるのです」

「王妃………。何と光栄な」

「王子様が直々に選ばれるのですね」

「はい」

大男は答えた。

「こちらにも来られていますよ」

「それは本当ですか!？」

「ええ、間も無く来られます」

「それは大変」

二人はそれを受けて顔を見合わせた。それから大男に対して言つた。

「少しお時間を頂けますか」

「王子様にお目通りする為の身支度をして参ります」

「どうぞ」

彼はそれを認めた。すると二人は急いで衣装部屋に駆け込んで行つた。それを開かれた扉の奥から見ている男がいた。先程の老人である。

「ふむ」

彼は二人の様子を見ながら頷いていた。

「あの二人は止めておいた方がいいだろうな」

ティズベとクロリンドを見ながらそう呟いた。

「コメディアンになるならともかくな。むしろあの貧しい身なりの娘の方がいい」

先程パンとコーヒーを手渡してくれたチエネレントラに思いを巡らす。

「頭の中に鍛冶炉があつて槌を打っている者達より遙かにいい。さて、これからどうなるか」

今度は大男を見る。

「彼等には仕事をしてもらおう。さて、わしは」

ここで奥に引つ込んだ。

「着替えるでしょう。そしてまた一仕事だ」

それから姿を消した。屋敷の中では騒ぎが続いていた。

「ねえチエネレントラ」

「はい」

「この帽子どうかしら」

「いいと思いますよ」

「ねえチエネレントラ」

「は、はい」

「この靴はどうかしら」

「凄くいいと思いますよ」

「ねえチエネレントラ」

「ねえチエネレントラ」

彼女達は衣装部屋の中で帽子や靴だけでなく羽飾りにネックレスも出しながらチエネレントラに問う。チエネレントラは二人の間を駆け回りながらそれに対応する。額に汗をかき必死であった。それが終わると二人の姉は胸を大きく張って衣裳部屋から出て来た。

「これでいいわ」

「完璧ね」



二人は顔を見合わせてニヤリと笑った。

「王子様は私のものよ」

「あら、それはどうかしら」

二人は互いを見つつ悠然と微笑んだ。だがその微笑みもやはり気品はない。何処かしら面白さと滑稽さが漂っているのである。

「ふう」

チエネレントラはその後ろにいた。疲れたのか溜息をついている。だが姉達はそんな彼女にまた命令した。

「ねえチエネレントラ、これを」

クロリンデが懷から何かを取り出してチエネレントラに手渡した。

「あちらの方に。いいわね」

見ればお金であった。半スクードある。実はお金はあったのだ。大男を指差しながらそう指示をする。

「わかりました」

チエネレントラはそれに従いお金を大男に渡しに行く。そこに髭の老人が出て来た。

「貴方は」

「この方が我々の長でございます」

大男は恭しくそうチエネレントラに言った。老人はにこりと頭を下げて微笑む。チエネレントラは彼の顔を見てはたと気付いた。

「貴方は」

「まあまあ」

彼は右目を瞑って微笑んで彼女に対して言った。口の前に右の人差し指を縦にして置く。

「ここは静かに、いいね」

「は、はい」

チエネレントラは小声さ囁く彼に対して頷いた。

「明日になればいいことがあるから」

「いいことが」

「いずれわかるよ。さて」

老人はそう言い終わると小声を止めチエネレントラに対して言った。

「有難うございます」

そしてお金を受け取った。それから一行を引き連れて屋敷を後にした。

「またおいで下さいませ」

「うむ」

二人の姉達の見送りを受けて去る。屋敷には三人だけとなった。

「明日」

屋敷の中に残ったチエネレントラは老人の言葉を思い出していた。そして何があるのだろうと考えていた。だが何があるのか全くわからなかった。彼女は首を捻った。

「何なのかしら、私には全くわからないわ」

「ふう、やっと帰られたわ」

「やれやれね」

だがその考えは中断された。二人の姉が屋敷の中に戻ってきたのだ。そして彼女達はまた言った。

「さあチエネレントラ」

二人の姉は彼女に顔を向ける。

「リボンとマントを持って来て」

「はい」

ティズベに言われて衣装部屋に向かう。

「私はクリームと髪油。とっておきのをね」

「は、はい」

リボンとマントを持って来るとすぐに化粧部屋に駆け込む。

「ダイヤモンド」

「はい」

「私はサファイア」

「わかりました」

慌しく駆け回る。そして持って来た物を姉達に手渡す。大忙しで

あつた。

「それにしても御父様は遅いわね」

「ええ」

とりあえず着飾った姉達は汗をかくチェネレントラには目もくれずそう話していた。

「このことを早くお知らせしないといけないのに」

「それは私がやるわ、姉さん」

クロリンデが言った。

「何言ってるのよ、私が言うわ」

だがティズベはそれに反対した。

「私がお姉さんなのよ。忘れないでよね」

「あら、姉さんに大仕事をやらせるなんてできないわ」  
しかしクロリンデはそう言って反論した。

「妹は姉の役に立つものですから」

「何言ってるのよ、いつもぐうたらしてるくせに」

「それは姉さんの方じゃないかしら」

「言ってくれるわね、全く」

「おほほ」

そんな話をしていると扉が開いた。そして大柄で顔の細長い老人が入って来た。髪は白く目は黒い。その髪型と服装から貴族であるとわかるがどうにも品がない。細長い顔は何か馬にも似ているし目にも厳しさはなく俗っぽさとひょうきんさが漂っている。顔にもしまりがなく少し赤い。何処かの酔っ払いにも見える顔であつた。

「ふうっ」

彼は溜息をつきながら屋敷の中に入って来た。

### 第一幕その三

「御父様」

二人の娘は彼を見ると笑顔で彼に駆け寄ってきた。だが彼はそんな娘達を不機嫌な顔で見た。

「えい、いい」

彼は手で娘達を追い払った。そしてやはり不機嫌な声で言った。

「御前達は今日限りこのドン＝マニフィコの娘ではないわ」

「どうしたの？」

「また何かあったの？」

だが娘達は動じてはいなかった。づやらいつもこんなことを言っているらしい。見ればその声も顔も不機嫌なだけで怒っているというわけではなかった。慥然とはしていたが。

「全ては御前達のせいだ」

「私達の？」

「そうだ。今朝のことを覚えているか」

「今朝？何かあったっけ」

「さあ」

二人は顔を見合わせてそう言い合った。

「覚えておらんのか、あの時のことを」

「朝……ああ、あれね」

「あれは御父様が悪いんじゃない。用事なのに何時までも寝ているから」

「口ごたえはいい、あの時わしはいい夢を見ておった。男爵たる者に相応しい夢をな」

「ふうん」

「どんな夢なの？」

「では言おう。わしのその素晴らしい夢を」

やたらともつたいぶって話す。常識で考えてそう偉そうに話すこ

とでもないが彼は異様に胸を張って話をはじめた。男爵らしい威厳を醸し出しているつもりだがやはりその仕草も表情もユーモラスなものであった。彼はそれに気付いているのかいないのかそうした動作を繰り返していた。大袈裟な身振り手振りで話を続ける。

「光と闇の狭間にわしはいた。そしてそこで一頭の素晴らしい口バを見つけたのだ」

「ふんふん」

二人の娘はそれを興味深そうに聞いている。ふりをしているだけであった。

「その口バに無数の翼が生え、そして飛んだのじゃ。それから鐘楼の上で玉座に座るように鎮座した。そこで鐘の音が鳴った。ところがじゃ」

ここで娘達を睨んだ。

「御前達が起こしてくれたのじゃ。それから慌てて家を出た。じゃが頭にあるのはその夢のことばかり」

「それについて知りたいのね」

「そうだ」

彼は頷いた。

「一体どういう意味なのかな。鐘はおそらく祝いだろっ」

「うん」

「羽根は御前達で飛ぶのは今の生活におさらばということじゃろっ。最後の口バはわしじゃ。わしは栄誉を極める身分になるのじゃ」

かなり自分に都合のいい解釈をする。だがそれによって彼は得意の絶頂に入った。

「どうじゃ、素晴らしい夢じゃろっが」

「何かこじつけばかりに聞こえるけれど」

「ねえ」

「ええい、五月蠅いわ。とにかくじゃな」

彼は娘達が賛同してくれないのでさらに機嫌を悪くさせた。

「わしは栄華を極めるのじゃよ。多くの孫達に囲まれてのう」

「ふうん」

「じゃあお祖父ちゃんになるのね」

「何を言う、わしはまだ若い」

ムツとした顔でそう返す。

「しかしそれもこれも全ては御前達次第じゃ」

「ええ」

「わかってるわ」

二人は真剣な顔になってそれに応えた。

「安心して御父様」

「きつと私がお妃様に」

「何言ってるのよ、それは私よ」

「私よ」

「まあよい」

マニフィコはそんな娘達を宥めた。それから言った。

「それで王子は来られるのか」

「先程使者の御一行が来られたけれど」

「ふむ、ではもうすぐじゃな。わしは運がいい」

彼はそう言つてにやけた顔になった。

「王子様にお目通りが適うのだからな。それだけではなく」

「私がお妃に」

「私が」

ここでも二人はいがみ合う。姉妹であるが妙に滑稽な光景ではあった。権勢の前には血の？がりなど無意味ということなのであろう。

「あの王子様がわしの娘をお妃に迎えられる。夢が現実となるのだ。

チェネレントラ」

「はい」

彼はここでチェネレントラを呼んだ。

「コーヒーを。とびきりのをな」

「わかりました」

コーヒーを奮発した。暫くしてチェネレントラがコーヒーを一杯

持つて来た。

「どうぞ」

「御苦労」

それを悠然としたような動作で受け取る。そして一口飲む。

「ふむ」

あえて大人の風格ぶった仕草をする。それから二人の娘達に顔を向けた。コーヒーのカップと皿は持ったままである。

「我が愛する娘達よ」

「はい」

「この屋敷は見ての通り半分壊れておる。後の半分も壊れかけておる」

「はい」

「それを救い、つつかえ棒になるのが御前達の役割だ。それはわかっ  
つておるうな」

「無論でございます」

あまりそうは見えないとはいえ彼女達もまた貴族の娘である。家が  
がどれだけ重要であるかはわかつていた。家柄なくしては貴族では  
ないのである。

## 第一幕その四

「そなた達はその頭を使わなければならない」

「はい」

「わかるな。服装や話し方に心を配れ、そして王子の心をその手の中に収めるのだ」

「わかっております」

二人の娘はにこりと微笑んでみせた。

「この笑顔で」

「よしよし」

マニフィコはその笑顔を見て安心したように笑った。

「頼むぞ、ははは。チェネレントラ」

「はい」

「これをなおしておいてくれ。ではな」

三人は話を終えるとそれぞれの部屋に戻った。後にはコーヒーを片付けるチェネレントラだけが残った。彼女は台所にそのカップと皿を持って行こうとした。その時であった。

「御免下さい」

扉を叩く音がした。彼女は台所に駆け込みカップと皿を置くとすぐに戻った。そして扉を開けた。するとそこには先程の一行の制服を着た若い男がいた。

見れば従者の服を着ているがとても只の従者とは思えなかった。

黒い髪は見事に整えられ黒い瞳を持つその顔は優雅に微笑んでいた。口も赤く顔立ちも軽やかなものであった。そしてその立ち姿も優雅でありまるで貴族、いや王族の貴公子のようであった。

「貴方は」

「私ですか」

その若い従者はチェネレントラに問うた。

「はい」



「私は従者です。実はこの屋敷に用がありまして」

「用件……何でしょうか」

「この家にマニフィコ男爵のご令嬢がおられますね」

「はい、そうですけれど」

「どなたでしょうか」

「三人おりますが……」

「おや」

従者はそれを聞いて不思議そうな顔をした。

「二人ではなかったのですか」

「それは建前のことで。男爵家ながら貧しく」

「娘は二人までしか育てられないと」

「そうなのです。上の二人の姉はいいのですが末っ子の私が  
チエネレントラはそう言って悲しい顔をした。

「この通りの姿なのです」

「何と」

従者はそれを聞いて思わず嘆息した。

「事情があるにしろそれはあまりではないですか」

「仕方がないのです」

彼女は悲しい顔のままそう答えた。

「私は男爵の本当の娘ではないのですから」

「本当の娘ではないとは」

「はい」

彼女は従者に対して話をはじめた。

「私の母は寡婦でした。そして男爵と再婚したのです」

「ほう」

「上の二人の姉は男爵の連れ子でした。つまり私は継子なのです」

「だからですか。そんな服を着せられているのは」

「服だけではありません。私は家事の一切をやっております」

「それはまた」

「うちは貧しいから。仕方がないのです」

彼女はここで微笑んでみせた。

「こんな話をしても仕方ないですけどね」

「いえ」

従者はそれを否定した。

「そんなことはありませんよ」

彼は優しい声でチエネレントラに対してそう言って慰めた。

「貴女がお優しい方であるというのはわかります」

「どうしてですか？」

「その瞳です」

従者はチエネレントラの瞳を見て語った。

「瞳が」

「そうです。私は師に言われました。人を見るにはその瞳を見よ、と」

「はい」

「貴女のその瞳はとても綺麗で澄んでいる。心根の汚い者はそんな瞳は持つてはいない」

「そうでしょうか」

「私はそうだと思います。ですから私は」

「私は」

続きを語ろうとした。だがここでそれぞれの部屋から二人の姉達が出て来た。

「ねえチエネレントラ」

「ん!？」

従者はそれを見て顔を上げた。そして二つの部屋をそれぞれ見た。

「ちよつと来て」

「こつちも」

「はい」

チエネレントラはそれに従い部屋に向かった。一つが終わればもう一つに。まるで小間使いのようであった。

「ふむ」

従者はそれを見ながら考えていた。その目はチエネレントラから離れることはない。

「あの瞳からは唯ならないものを感じる。何という美しい瞳か。そしてその姿も」

粗末な服を着て汚れてはいるが彼にはしかと見えていた。彼女の美しさが。だからこそ彼女から目を離さないのであつた。

「素晴らしい、何と素晴らしい娘なのだ。是非私の妻にしたい。しかし」

彼はここで屋敷の中を見回した。

「マニフィコ男爵は何処だ。確かいる筈だが」

「従者殿が来られたようだな」

「はい」

ここでマニフィコの部屋の奥から声がした。そしてチエネレントラに案内され彼が姿を現わした。二人の姉達はその後ろについた。

## 第一幕その五

「やあ、これはどうも」

恭しく従者に頭を垂れる。従者はそれに挨拶を返す。

「して殿下は」

「もうすぐお着きになられます」

従者はそう答えた。

「左様ですか。それでは」

マニフィコはそれを受けて娘達に顔を向けた。

「その間に準備を整えておくように」

「畏まりましたわ、御父様」

彼女達はそれを受けて恭しく挨拶をする。

「それでは」

そしてその場を後にする。マニフィコはそれを見送ってから従者に顔を戻した。

「困った奴等でした。何しろ鏡の前に行くとそこから戻って来なくなるのです」

「はあ」

「しかしすぐに戻りますのでご安心下さいませ。宜しいですか」  
「勿論です」

従者はそう答えた。顔では大人しく頷いているだけであつたが実際は色々と考えていた。

（何か変わった男だな。威厳あるつもりだが滑稽にしか見えない）  
マニフィコを見ながらそう考えていた。

（娘達もだ。貴族というよりは喜劇役者のようだが。だがあの娘は違つ）

ここで彼の後ろにいるチェネントラに顔を向けた。

（我が師アリドーロが教えてくれた心優しい娘。あの娘に違いない）  
彼にはわかつていた。そしてまたマニフィコに何か言おうとする。

だがここで扉の方から大勢の人々が入って来た。

「殿下が来られました！」

「えっ」

「早くしろ、早く！」

マニフィコは娘達を急がせる。彼女達はそれに従い部屋から飛び出て来た。そして下に降りて来る。チエネレントラは台所の方に身を隠した。そこからそつと見ている。

先頭にいるのは先程の大男であた。彼は一行の先頭に立ち屋敷の中に入って来た。そしてその中で一際見事な服に身を包んだ青年が出て来た。大柄で人なつっこい顔をしている。髪と目は黒く、とりわけ目は大きい。まるで皿のようである。

「殿下であらせられます」

従者はその大柄な青年の前に来てそう言った。

「これは」

マニフィコと娘達は頭を垂れる。

「御会いできて光栄であります」

「うむ」

王子はそれを受けて満足そうに頷いた。

「顔をあげて」

「はい」

マニフィコ達はそれを受けて顔を上げる。そして王子の顔を見た。

王子は三人が顔を上げたのを受けて言った。

「今日私がここに来た理由はわかつているね」

「勿論でございます」

三人はそれに応える。

「じゃあ話は早い。私のお妃だが」

「はい」

「美しく、そして聡明でなければならない。それでいて心優しく気品があり高貴で。その様な女性を探しているんだよ」

「それでしたら」

ティズベとクロリンデが前に出ようとする。だがマニフィコがそれを止めた。

「待て」

そして娘達に小声で囁く。

「どうしてですの」

「慌てるな。焦っては駄目だ」

彼は娘達に対して囁く。

「憤み深そうに見せるのだ。よいな」

「ええ、わかったわ」

二人は父の言葉を理解して頷いた。それから三人は何やら相談をしている。それは王子も同じであった。

「殿下」

何故か王子が従者の耳元で囁いていた。

「これで宜しいですね」

「ああ」

従者はそれを聞きながら頷く。

「ダンディーニ、中々いいぞ」

「有難うございます」

彼はそれを受けて微笑んだ。

「どうやら彼等はラミー口様のお顔を知ってはいないようですね」

「まあ普通はそうだろうな」

彼はそれを受けて頷いた。

「普通は儀式やら応接やらで宮殿から出られないからな。ここに来るのもはじめてだしな」

「そういえばそうでしたね」

「うむ。しかし市井というのもいいものだな」

「そうですね」

王子、いや仮の王子であるダンディーニはそれを受けて微笑んだ。「庶民の暮らしをお知りになるのもいいことですよ。アリドー口様もそう申し上げておられましたか」

「どうやらそうみたいだな。ではな」

「はい」

従者、いや実は本当の王子であるラミーロはダンディーニから離れた。そして丁度相談を終えたマニフィコ達に顔を向けた。どうやら彼等はあえて王子の替え玉を立てて何かと見ているらしい。

「ドン＝マニフィコ男爵だったか」

「はい」

マニフィコは名を呼ばれてそれに応えた。

「そこにいるのが卿の娘達だな」

「左様でございます」

「ふむ」

ダンディーニはそれを受けて頷いた。そしてティズベとクロリンデを見る。

「見た？」

「ええ」

見られた二人はそれぞれ囁き合った。

「殿下は私達の方を御覧になってるわよ」

「わかってるわ」

「いい調子よ」

「そうね」

彼女達はもう王妃になった気分であった。マニフィコもそれを見て満足そうである。

「これでよし」

満面に笑みを浮かべて笑っている。頭の中ではもうこれからのことについて考えている。

## 第一幕その六

「閣下から陛下か。ふふふ」

「さてさて」

だがそれを見ながらダンディーニとラミーロは全く別のことを考えていた。

「この三人は上手く動いてくれそうだな。面白いことになってきた」  
「あの娘は何処だ」

これから起こるであろうことを思いほくそ笑んでいるダンディーニに対してラミーロはチエネレントラを探していた。

「何も隠れることはないのに」

「さて」

だがここでダンディーニが芝居をはじめた。

「そこにある二輪の花」

「私達のことでしょうか!？」

「無論」

彼はそれを受けて頷いた。

「はい、その通り」

ダンディーニは頷いてみせた。

「どちらもまるでエトルリアの像」

「まあ」

二人はそれを聞いて思わず喜びの声をあげた。

「身に余る光栄でございます」

「いやいや」

彼は鷹揚に頷く。そしてまたラミーロに囁いた。

「如何ですか」

「中々いいぞ」

ラミーロはそれを受けて頷いた。

「その調子だ、いいな」



「わかりました」

彼は主にそう言われるとまたはじめた。

「私がある国に使節として向かいこの国に帰ったその時既に父であられる王は病床にあられた」

「はい」

「おいたわしや」

それを聞いて皆頭を垂れた。皆王への忠誠は持っていた。

「そして私にこう言われた。すぐに妻となるに相応しい者を探し出して選べと。それを受けて私は今この屋敷にいる」

「左様でございましたか」

「うむ。それで」

ダンディーニは話を続ける。ラミー口はその間に辺りに目をやりチエネレントラを探す。そして遂に彼女を台所のところで見つけ出した。

「そこにいたのか」

そしてダンディーニにまた囁いた。

「この屋敷にもう一人娘がいるかどうか尋ねてみる」

「はい」

彼はそれに応えた。そしてすぐにマニフィコに尋ねた。

「男爵」

「はい」

「この家にいる娘は二人だけかね。何でも三人いるそうだが」

「あ、それは……」

彼はここでバツの悪そうな顔をした。

「実は……」

「何かあったのかね」

「はい」

彼は暗い顔を作って答えた。

「実は亡くなってしまうして」

「そんな……」

台所の方でそれを聞いていたチェネレントラは今にも泣き出しそうな顔になった。

「言うに事欠いて何ということと言うのだ」

ラミーロはそれを聞いて怒りを覚えたがそれは何とか抑えた。そしてそのまま従者になりすまして様子を見守った。そしてダンディー二にまた言った。

「その台所のところにいる娘は何なのか聞いてみる」  
「はい」

彼はそれに従いまたマニフィコに尋ねた。

「それではあそこにいる娘は何だね」

「あそこ？」

「台所のところだ」

「ああ、あの娘ですか」

マニフィコは納得したように頷いてから答えた。

「使用人です。我が家の」

「そうだったのか。ふむ」

ダンディー二はそれを聞き納得したふりをしてみせた。

「少しあの娘を見たいのだがいいかね」

「あの娘をですか」

「そうだ。よいかね」

「殿下のご命令とあれば。これ」

彼はチェネレントラに声をかけた。

「殿下が御呼びだ。失礼のないようにな」

「けど……」

チェネレントラはそれに戸惑った。自らのみずばらしい格好を恥じているのだ。だがここでラミーロはまたダンディー二に耳打ちした。

「格好はどうでもいい。早く来るように言え」  
「わかりました」

彼はそれに答えてまた言った。

「服装なんかは気にしない。早く来るように」

「殿下の御言葉だ。早く来なさい」

「わかりました」

彼女はそれを受けて顔を俯け恥ずかしそうに出て来た。そしてラミール達の前にやって来た。

「彼女が我が家の使用人でございます」

「宜しく願います」

チェネレントラは頭を下げた。ダンディーニは彼女に顔を上げるように言った。

「はい」

彼女は顔をあげた。だがそれを見ているのはダンディーニではなくラミールであつた。彼女もそれは同じであつた。

「それで」

ラミールはまたダンディーニに囁いた。

「彼女を宮殿に呼んではどうかと言ってみろ」

「はい」

それを受けてまたマニフィコに対して言う。

## 第一幕その七

「男爵」

「はい」

「彼女も宮殿に呼んではどうかね」

「ご冗談を」

彼はそれを聞いて笑った。

「この娘は単なる使用人ですよ。それを」

「構いません」

しかし彼はそれでもそう答えた。

「わかつて言っているのです」

「しかしですな」

「続ける」

ラミーロはダンディーニにそうハツパをかけた。

「いいですから。それとも彼女を宮殿に入れては何か不都合でもあるのかな」

「いえ、それは」

そう問われてやはり口ごもった。

「では問題はなし、ということだ」

「いえ、そういうわけにはいきません」

それでも彼は引き下がらなかった。

「こちらにも何かと事情がありました」

「次の国王の命令でも？」

「滅相もない」

そう言われて彼は顔を真っ青にさせた。表情も凍りついてしまった。

「何故殿下のご命令に逆らえましょうか」

「ならばわかつてるな」

「しかし衣装が」

「それなら問題はありません」

ここでラミーロが出て来た。

「全てこちらで用意しますので」

「しかしですね」

「あの、もういいです」

だがここで当のチェネレントラがそう申し出た。

「私のことはいいですから。皆さんもう私のことは気になさらないで」

「しかし」

今度はラミーロがそれを止めようとした。だがチェネレントラの方が早かった。

「構いませんから」

そして台所の方に姿を消した。ラミーロはそれを追おうとしたがここであの髭の老人が出て来た。

「先生」

「殿下」

彼はラミーロに小声で言った。

「ここは私にお任せ下さい。いいですね」

「わかりました」

彼はそれに頷いた。そしてここは彼に任せることにした。

老人はまず裏手に回った。そしてそこから台所の方に来た。そこからそつと中に入った。見ればかなり酷い台所である。まるで廃墟のようであった。

「こんなところで料理ができるのだろうか」

老人はそう思いながら中に入る。そして中を見渡した。

そこにはチェネレントラが蹲っていた。そして一人泣いていた。

「これ」

老人はそんな彼女に声をかけた。チェネレントラはそれを受けて顔をあげた。

「貴方は……………」

「悲しむことはないよ。私の名はアリドーロという」

「アリドーロ」

「そうじゃ」

まずは彼女を安心させる為に名乗ってみせた。

「貴女の力になる為にここに参りました」

「けれど私は」

「悲しまれることはないのです」

拒もうとするチェネレントラに優しい声でそう語った。

「貴女の本音を御聞きしたいのですが」

「はい」

「今の状況から出たいですね」

「はい」

彼女はそれに答えた。

「今の惨めな立場はもう……。けれど私にはどうすることも」

「できるのです」

アリドーロはまた言った。

「貴女にはその力があります」

「そうでしょうか」

「はい。今あそこにいる者達ですが」

マニフィコとその娘達を指差す。

「あの者達は所詮は道化です。近いうちに道化に相應しい目に遭うでしょう」

そして今度はチェネレントラに対して言った。

「ですが貴女は違います。貴女のその御心は私は知っているつもりです」

「有り難うございます」

「ですからその御心に相應しい幸福があらなければなりません。そしてその幸福は」

言葉が続ける。

「私が授けましょう」

「貴方が」

「はい」

アリドーロはそれに答えて頷いた。

「その為にこちらに参ったのですから」

「お気持ちはわかりますが」

だがチエネレントラの不安そうな顔は変わらなかった。

「何故私にそこまでして下さるのですか」

「先程の御礼です」

アリドーロはそう答えた。

「貴女は先程私にパンとコーヒーをくださいましたね」

「はい」

「それへの御礼です」

「そんなことで」

だが彼女はそう言われても信じようとはしなかった。

「私をからかっているのではないですか？」

「滅相もない」

だがアリドーロはそれを否定した。

「宜しいですか」

「はい」

「御心を高く持って下さい。貴女はその気高く優しい御心故に救われるのですから」

「あの」

だがチエネレントラはそれでも表情を暗いままにしていた。

「一体何のことかわからないのですけれど」

「それでしたら」

彼はそれを受けて語りはじめた。

「貴女も神は信じておられますね」

「はい」

チエネレントラはそれに答えた。

「勿論です」

「ならば話が早い」

アリドーロは話を続けた。

「神は心優しき者をお救いになられます。そう、貴女のような方を「私を」

「そうです。その為に私はここに來たのです。神は常に天界の玉座にて貴女を見ておられます」

「何と」

「神が貴女を救われるのですよ。今までの苦勞、そしてその御心をお知りになられて。聴こえませんか」

チエネレントラに語る。

「神の御声が。さあここを出しましょう」  
「けれど」

「御心配なく。彼等も宮殿に向かいます。貴女に対して何かを言う者はいません」

そう言つてチエネレントラを安心させた。そして彼女を裏から台所から出して導く。しかしチエネレントラはそれでも行こうとはしなかつた。

「おや」

アリドーロはそれを見て言つた。

「まだ戸惑つておられるのですかな」  
「はい」

彼女は首を縦に振つてそれに応えた。

「信じられませんが、そんなお話」  
「今はそうでしょう」

彼はにこりと笑つてそう言つた。

「ですが徐々にわかつてきます」  
「そうですね」

「ですからこちらへ。そして馬車に乗りましょう」  
彼女をさらに導いた。チエネレントラは戸惑いながらもそれに従



いついていくことにした。

見れば表からはマニフィコと姉達が出ていた。そして馬車に乗せられ宮殿に向かう。チェネレントラはそれを横目で見ながらアリドロ口に従って進む。

「さあ、これに」

そしてアリドロ口の馬車と一緒に乗った。そして彼女も何処かへ向かうのであった。

## 第二幕その一

### 第二幕 宮殿にて

宮殿に案内されたマニフィコ達はダンディーニに食堂に案内されていた。白い白亜の宮殿に無数の煌びやかなシャングリラが輝いている。彼等はその中で艶やかな服に身を包んでいた。そしてテーブルにそれぞれ向かい合って座り何やら話をしている。

そしてその中で得意気な顔をしている。とりわけマニフィコは上機嫌であった。何やらダンディーニに話をしていた。それはどうやら講義のようなものらしい。

「ふむふむ」

ダンディーニはそれを聞いて頷いていた。

「貴方は実に博識であられる」

「いやいや」

マニフィコは謙遜する素振りを見せながらもやはり有頂天にあった。

「何処でそれだけのワインに関する知識を手に入れられたのですかな」

「いや、これは」

彼はにたにたと笑いながらダンディーニに対して言う。

「唯の趣味が高じたものであります」

「ほう」

ダンディーニはそれを聞いて興味深げな顔をした。

「好きこそものの上手なれといいますからな」

「そういうわけではないですが」

「それでもそれだけの知識は素晴らしいものです。これ」

彼はここで側に立っているラミールに声をかけた。

「男爵を酒の貯蔵庫に案内するように」

「わかりました」

ラミーロはそれを受けて頷いた。そしてマニフィコのところによつて来た。

「それでは男爵、こちらへ」

「あの、殿下」

案内されることになったマニフィコはここでダンディーニに尋ねた。彼が偽の王子であるということは全く気付いてはいないのであった。

「何故貯蔵庫に」

「これから貴方を試させて頂きます」

彼はにこりと笑ってそう答えた。

「三十回試し飲みをして頂きます」

「三十回の」

「そうです。それでふらつきもせず、しっかりとておられれば貴方は酒倉役人です。丁度今開いておりまして」

「酒倉役人に」

マニフィコはそれを聞いて思わず目の色を変えてしまっていた。

「それは本当ですか!？」

「はい」

ダンディーニは笑顔で頷いた。

「三十回ですよ。宜しいですか」

「勿論です。是非やらせて下さい」

そして彼はそれを快諾した。そして席を立つ瞬間にそつと娘達に耳打ちした。

「後は頼むぞ」

「お任せ下さいな」

「期待していてね」

「うむ」

マニフィコはそこで席を立った。だがここでダンディーニはラミーロを再び呼んだ。

「はい」

ラミールはすぐに彼の側に来た。そして耳をそばだてた。

「これで宜しいですか」

ダンディーニはそつと彼にそう尋ねてきた。無論マニフィコ達には悟られないようにして、である。

「ああ、上出来だ」

ラミールはそれを聞いて頷いた。

「それでいいぞ」

「有難うございます。あとは」

「わかつている」

ラミールはその言葉に応えた。

「ここは御前に任せるぞ。あの二人をよく見てくれ」

「はい」

そう答えてティズベとクロリンデに目をやる。

「あの二人のことはお任せ下さい」

「うむ」

「全てを見極めてやるつもりです」

「頼むぞ。だが大体はわかっているな」

「そうですね」

彼はそれに答えた。

「まああの二人の心は見せ掛けだけのメロンです」

「外見だけか」

「そうですね。才能はがらんとどの型押し器、頭の中は空家となっております」

「上手いことを言うな」

「いえいえ」

にやりと笑った主に対してそう返す。

「それではここは頼んだぞ」

「はい」

そして二人は仮の關係に戻った。ダンディーニはラミールに命じる。

「では案内してさしあげるように」

「はい」

こうしてマニフィコはラミー口案内されて酒倉に向かった。そして後にはダンディー二と二人の娘達が残った。彼はここで二人に顔を向けた。

「これでゆつくりとお話ができますな」

「はい」

二人はそれを受けて頭を垂れた。

「恐れ入ります」

「いやいや」

そう言われていささか謙遜を覚えながらも話を続ける。

「それでお話ですが」

「はい」

「貴女方はそもそも姉妹であらせられます」

「はい」

「それは愛の轡轡により回され出来上がったものでありますな」

「御言葉ですが」

ここでティズベが言った。

「私は長女でございます。それをよく御存知下さいませ」

「いえ」

しかしここでクロリンデも申し出てきた。

「私の方が若いですよ」

そう言いつつ姉の方に顔を向けて得意気に笑う。

「若い方が宜しいですわね、殿下も」

「うつむ」

戸惑うふりをする。それに乗ってティズベがまた動いた。

「殿下」

そしてダンディー二に対してまた言った。

「子供より大人の方がものを知っております」

「あら、それは」

だがクロリンデも負けてはいない。

「塩が欠けた水は味がありませんわ。塩も時間が経つと下に沈んで水には味がなくなりますわ」

「ふむ」

「ですから私に」

「いえ」

しかしティズベも負けてはいない。

「私の塩は永遠です」

「殿下」

クロリンデが逆襲に出た。

「私の唇を御覧下さい」

「はい」

「よく御覧遊ばせ」

そう言つてダンディー二に自分の唇を見せる。

「赤いでございますよう」

「ええ」

「口紅なぞつけてはおりませんわよ。そしてこの白い肌も」

「殿下」

しかしそこをティズベに突っ込まれる。

「それは白粉のせいですわよ」

そして言葉を続ける。

「この髪を御覧になつて下さいまし。女の命は髪」

「はあ」

「髪に勝るものではありませんわ」

「殿下」

クロリンデも自分の髪を見せる。

## 第二幕その二

「私の髪は如何でして」

「ううむ」

「では私の齒の白さは」

「爪の綺麗さは」

二人はもう何が何でもダンディーニを自分の虜にするつもりであった。彼はそれを戸惑うふりをして相手をしながら二人に対して恐る恐るの演技をしながら言った。

「あの、二人共」

「はい」

「何でしょうか」

「もう少し落ち着かれて」

「あつ」

「私としたことが」

二人はそう言われて我に返った。

「宜しいですか」

「はい」

二人は頷く。

「私を信用して下さい。いいですね」

「はい」

「ですからここは私にお任せ下さい」

「わかりました」

王子にそう言われては流石に頷くしかなかった。ダンディーニはそれを確認した後でまた二人に対して語りはじめた。あえてゆっくりと言つ。

「まず」

「はい」

「決めるのは私です」

「はい」

「全てが決まったならお話します。いいですね」

「わかりました」

こうして二人を黙らせた。こうして三人はとりあえずこの場の騒ぎを終わらせたのであった。

三人が食事の間で騒いでいた頃マニフィコは酒倉で上機嫌でいた。ワインを次々と飲みながら周りの者に得意気に語りかけている。

「これは」

「はい」

「フランスのマルセイユ産ですな」

「おお」

「正解です」

「ふふふ」

彼は次には別の樽のワインを飲んだ。それから言う。

「この甘さに発泡性があるところを見ると」

「はい」

「これはイタリアモデナのものですな」

「何と」

「その通りです」

周りの者は彼に合わせるようにしてそう言う。

「何とまあ」

「三十の樽のワイン全てを言い当てられましたな」

「どうですか、私のワインへの目利きは」

彼はやはり得意そうに周りの者に尋ねていた。

「かなりのものでしょう」

「はい、全く」

「しかも全くふらつかれてはおられない。素晴らしいです」

「生憎ワインは私の血でして」

彼は語る。

「幾ら飲んでも酔わないのです」



「成程」

「将にワインの為に生まれてきたような方だ」

「左様、これで私の実力がわかりましたな」

「はい」

ラミールが答える。

「それでは貴方はこれから酒倉係となつて頂きます」

「身に余る光栄でございます」

「そして貴方はこれから酒杯管理担当長官になられ」

「はい」

「葡萄収穫担当責任者になられ」

「何と」

「酒宴担当指導者になられるのです。宮中の酒に関することは全て貴方に一任されることとなりました」

「素晴らしい、何という栄誉でしょうか」

「貴方にこそ相応しいものであります」

「いやいや」

一応謙遜はしているがやはりマニフィコは得意気に笑っていた。

「胸の中で火花があがったようでございます」

「はい」

「それでは皆様」

ここで彼は周りの者に対して言った。

「これから私が言うことを書き記して下さいませ。そして」

「そして？」

「それをまた写して頂きたい。そうですね」

彼は勿体ぶって言う。

「六千枚程。いいですか」

「わかりました」

皆頷く。彼はそれを確認してから大袈裟に口を開いた。

「それでははじめますぞ」

「はい」

ペンを手にする。そしてはじまった。

「我がドン＝マニフィコ」

「我がドン＝マニフィコ」

書こうとする。しかしここでマニフィコがまた言った。

「おっと、ここは大文字ですぞ」

「おっとと」

「危ないところでした」

「気を着けて下されよ。そして」

「そして」

「そしてはいりませんぞ」

「わかつております」

そういうやりとりを続けながら書く。マニフィコは自分の名が大文字で書かれたのを書くにしてから再開した。

「我がドン＝マニフィコは極めて由緒あるモンテフィアスコーネの公爵にして男爵」

「おや」

それを聞いてラミールが声をあげた。そしてマニフィコに対して問うた。

「公爵であられたのですか」

「ええ、先祖は」

彼は胸を張ってそう答えた。事実であるがかなり遠い先祖である。ハツタリだと言っても差し支えはない。

「まあ大したことではありませんが」

そう言いながら胸を張っているところを見てもハツタリであることがすぐにわかる。だが彼はそれを気にも留めず話を続けるのであった。

「大長官にして大指導者、その他二十に余る肩書を有する者として」「大長官にして大指導者、その他二十に余る肩書を有する者として」「貴族は何よりも肩書が重要なのである。マニフィコも殊更にそれを強調しているのであった。」

「その権限を大いに發揮し、これを読む者は命を受けるものとする」  
「その権限を・・・・・・」  
書き続ける。筆記も楽ではなかった。

## 第二幕その三

「十五年に渡り美味なる葡萄の酒に一滴の水も混合せぬこと」

「十五年に渡り……」

「左様、これが重要なのです」

「何故でしょうか」

ラミーロが問う。

「ワインは純粹に楽しむものなのですから。水なぞ混ぜるのは外道なのです」

「外道ですか」

「少なくとも私はそう考えます」

彼は真剣な顔でそう答えた。

「本来の味を損なうものですからな」

「そうですか」

他にも理由はある。悪徳業者を防ぐ為であるがマニフィコはどうもそういうことには関心がないようであつた。あくまでワインの味について考えているようであつた。

「それではまた言いますぞ」

「はい」

そしてまた言葉を再開した。

「違反せし時は逮捕し絞首刑とする」

「またそれは厳しい」

「それ程せねばなりませんぞ、これは」

マニフィコはラミーロに対しそう答えた。

「さもないければ違反者は消えません」

「そういうものですか」

「はい」

そしてまた言葉を続ける。

「理由は……」

「理由は・・・・・・・・」

「それ故・・・・・・・・年度・・・・・・・・」

「それ故・・・・・・・・」

そして筆記が終わった。それを見届けてマニフィコは満足気に頷いた。

「それではそれを町中に貼り出すようにな」

「わかりました」

「そして後は」

「そうですね」

マニフィコは悠然と答えた。

「宴といきましょう、酒場にも繰り出して」

「酒場に!？」

皆それを聞いて喜びの声をあげた。

「そう、皆で」

マニフィコは満面に笑みを讃えてそう頷いた。

「わしのおごりでな」

「ううむ、流石は男爵」

「太っ腹ですな」

「いやいや」

どうやら酒で気が大きくなっているらしい。上機嫌でそれに応える。だがそれだけではなかった。

「まだあるぞ」

「それは何でしょうか」

「ピアストラの金貨だ。それも十六枚」

「本当ですか!？」

「男爵家の名にかけて嘘は言わぬ」

「そしてそれはどうして得られるのでしょうか」

「宴の酒はマラガのワインとする。それを最もよく飲んだ者に授ける。それでよいな」

「はい!」

「男爵万歳！新しい長官万歳！」

「貴方に幸せが訪れますように！」

「ほっほっほ、よいよい」

彼はそれを聞いてさらに機嫌をよくした。そして皆に対して言った。

「ではこれから繰り出すとしようぞ、仕事も終わったしな！」

「はい！」

皆マニフィコと共にその場を後にした。だがラミールだけはその場に残った。

「うつむ」

彼は去って行くマニフィコの背を見ながら考え込んでいた。だが決して深刻な顔ではなかった。

「妙な男だな、つくづく」

マニフィコのことについて考えているのは言うまでもないことである。彼がどういった者であるか見極めようとしているのであった。「根っからの悪人ではないようだ。それにしても」

そう言いながらその場を後にする。

「変わった男だな。どうするべきか」

そして王子の間に入った。そこにはダンディーニがいた。二人は落ち着いた雰囲気の一部屋の中で話をはじめた。

「そっちはどうだった」

まずはラミールが問うた。

「あの二人ですね」

「そうだ」

「また変な者達です」

彼は口元を綻ばせてそう答えた。

「妙に見栄っ張りで勝気で。悪者ではないようですか」

「そうか」

「どちらも似たようなものですな。ただ結婚されるには考えられた方が宜しいかと」

「それはわかっている」

ラミー口はそれにすぐそう答えた。迷いはなかった。

「あの二人の父親もな。似たようなものだし」

「そうなのですか」

「ああ。今他の者を連れて宴に出ている」

「はあ」

「あれだけ飲んでもまだ飲めるらしい。それはそれで凄い話だが」

「という三十樽の酒を全て飲んだのですか」

「そうだ」

「それでまだ。まるで化け物ですな」

「東洋では蛇がそれだけ飲むそうだな」

「そうなのですか？」

「大蛇がな。日本ではそうらしいぞ」

「ここは日本ではありませんからな。さしづめ酒の神ディオニユソ

スといったところでしょうか」

「そういうには品がないがな」

「それはそうですが」

「まあそれはいい。それでだ」

「はい」

「私の妃だが……」

それについて言おうとしたところで例の二人の娘達が部屋に飛び込んで来た。そしてダンディー二の左右に張り付いてきた。

## 第二幕その四

「ねえ王子様」

「はい」

「どちらになさいますか」

「どちらと言われまして」

やはりここでも戸惑う演技をしていた。

「お一人としか結婚できませんし」

「それはわかつております」

「そして残られた方は」

「はい」

二人はそれを聞いてゴクリ、と息を飲んだ。緊張が二人の間だけに走った。

「私の従者と結婚されては如何でしょうか」

「どうも」

ラミーロは紹介されて恭しく頭を垂れてみせた。

「彼も丁度妻となる女性を探している頃です」

「えっ……」

二人はそれを聞いて言葉を失った。

「彼も貴族ですよ」

ダンディーニは微笑んでラミーロをそう紹介した。

「由緒正しい。ゆくゆくは私の片腕になるかも知れません」

「けど……」

二人はここで顔を向け合った。そしてヒソヒソと話を始めた。

「どう思う、クロリンデ」

「どうって言われても」

「確かにハンサムよね。育ちも良さそうだし」

「それはそうね。けれど王子様じゃないわよ」

「よくて伯爵位かしら」



「そんなところじゃないの」

「私達から見ればそりゃ玉の輿だけれど」

「王子様と比べたらねえ」

「そうよねえ」

相も変わらず取らぬ狸の皮算用であった。ラミールとダンディー

二はヒソヒソ話をする二人を横目で見ながら自分達も話をはじめた。

「面白いことを言ったな」

「有難うございます」

ダンディー二はラミールにそう答えてにこりと笑った。

「また面白いことを考えているようだな、あの二人は」

「ええ。見ていて飽きません」

「全くだ。これは後々まで話の種になる」

「そうですね。しかし話は何時か終わりがあるものですからこの喜劇も終わることでしょう」

「問題はこういう終わり方をするかだな」

「ええ。面白い結末といきたいものです」

「うむ」

「殿下」

ここで一人の従者が部屋に入ってきた。彼はラミールに向かおうとしたが気付いてダンディー二に向かった。

「どうした」

ダンディー二はそれを見て鷹揚に応える。

「アリドール先生が戻られました」

「そうか」

彼はそれを受けてラミールに顔を向けた。

「先生が戻られましたな」

「うむ」

彼は頷いた。そしてダンディー二にまた何か囁いた。

「わかりました」

彼は答えると従者に顔を向けた。そして言った。

「すぐにこちらにお連れしてくれ」

「はい」

従者は頭を下げてそれに従った。そして彼はアリドーロを呼びに向かった。ティズベとクロリンデはそれを見て話を止めてダンディーニに顔を戻した。

「殿下」

「はい」

「そのアリドーロという方はどなたなのでしょう」

「私の師です」

彼はそう答えた。

「師」

「そうです。先生です。幼い頃より私を教え導いて下さった方です」

「はあ」

「私の第一の助言者です。あの方なくして私はないでしょう」

「それ程までに素晴らしい方なのですか」

「その通り。さあ、来られましたぞ」

そしてアリドーロが部屋に入って来た。貴族の服を着ている。彼はダンディーニの前に来ると恭しく頭を垂れた。それから申し出た。

「殿下」

「うむ」

ダンディーニは鷹揚に頷く。

「大広間に来られませんか。素晴らしい方が来られました」

「素晴らしい方が」

「はい」

アリドーロはここにこりと笑った。

「さる貴婦人が来られたのです。顔をヴェールで覆われて」

「貴婦人!？」

それを聞いてティズベとクロリンデが思わず声をあげた。

「ほっ」

ラミーロとダンディーはそれを横目で見て笑った。

「どうやら気になるようだな」

「ライバル出現とも思っているのでしょうか」

「だろうな」

「そして」

ティズベとクロリンデは二人のそんな目にも気付くことなくアリドーロに聞いた。

「その貴婦人はどなたですの!？」

「それは言えません」

彼は素っ気無くそう答えた。

「残念ながら」

「そうなのですか」

「一体誰なのでしょう」

「それはすぐにわかることです」

彼はそう答えた。

「それでは皆様行かれますか」

「殿下、どうなされます」

「そうだな」

ラミーロに問われ考える演技をした。それから言った。

「よし、行こう。大広間だな」

「はい」

「それでは行こう。さて」

彼はここでティズベとクロリンデに顔を向けた。

「貴女方はどうされますか」

「私達ですか？」

「はい。何でしたらこの部屋で休んでおられてもよいのですが」  
「いえ」

だが二人は彼の申し出に首を横に振った。

「私達も御一緒させて下さい」

「よいのですか？」

「構いませんわ」

「そうですわ、どれだけ素晴らしい方なのか是非共御会いたいで  
すし」

「無理をしているな」

ラミールとダンディーニはそれを聞きながらほくそ笑んだ。

## 第二幕その五

「さらに面白いことになりそうだ」

しかしそれは決して言わない。そしてアリドーロに従い大広間に向かった。ティズベとクロリンデも後について行く。こうして彼等は大広間にやって来た。

「おお、殿下」

先程の従者がダンディー二達を迎えた。

「よくぞおいで下さいました」

「うむ。ところで」

「わかつております」

従者は笑みで彼に応えた。

「あちらにおられますよ」

そこには白と金の美しいドレスに身を纏った女性がいた。ドレスの上からとはいえかなり素晴らしい容姿の持ち主であることがわかる。そして気品も漂っていた。

だが顔は見えない。しかしそれでも彼女が素晴らしい貴婦人であるということがわかった。

「彼女が」

「ええ」

アリドーロは頷いて答えた。

「あの方がです」

「そうか」

ダンディー二は了承した。ラミーロはそのすぐ後ろでその女性を見ていた。そして胸の鼓動が速くなるのを感じていた。

「これはどういうことだ」

彼はそれを不思議に感じていた。

「何故彼女を見ただけで胸がこれ程。何かあるというのか」

だがそれが何故かはまだわからなかった。彼はただその貴婦人を

見詰めるだけであつた。

「ううむ」

ダンディーニも見惚れていた。そして彼は貴婦人に対して語り掛けた。

「ヴェールをかけているとはいえ何という美しさだ」

彼女はそれを受けて頭を下げた。だが一言も発さず、物腰も静かなままであつた。

「もし宜しければ」

ダンディーニはさらに言った。

「そのヴェールを取って頂けぬでしょうか」

「わかりました」

彼女は一言そう答えた。そしてヴェールを外した。中から金色の髪と青い瞳を持つ麗しい女性が姿を現わした。

「おお………」

「何と………」

皆その姿を見て思わず息を飲んだ。想像していたより遥かに素晴らしい顔立ちであつたのだ。

とりわけラミーロの驚きようはすごかった。彼はその女性の顔を一目見るなり完全に心を奪われたようであつた。

「何と美しい……いや、あれは」

ここで彼は気付いた。

「彼女か。まさかと思うが」

「ふむ」

アリドーロはそれを横目で見ながら会心の笑みを浮かべていた。

「私の目に狂いはなかったようだ。殿下はあの娘に心を奪われられている」

そしてそれは他の者、そうティズベとクロリンデも同じであつた。彼女達もその貴婦人から目を離していなかった。

「見た、あの美しさ」

「ええ」

彼女達はそう言つて頷き合う。

「あんな綺麗な人はじめて見たわ」

「私も。一体誰なのかしら」

二人は貴婦人を見ながらそう囁いている。そしてふとクロリンデが気付いた。

「ねえ姉さん」

「何？」

「あの貴婦人だけれど」

「うん」

それから何か言おうとした。しかしここで新たな客がやって来た。「殿下」

マニフィコであつた。彼は酒に酔いながら上機嫌で部屋に入つて来た。一礼してから入るのは忘れないのは流石に守つてはいたがかなり碎けていた。元々の地であるうか。後ろには先程彼が連れて行つた者達がついてきている。皆顔が赤いところを見るとかなり飲んでるようである。

「宴の用意ができておりますが」

早速仕事に取り掛かつていたようであつた。彼にとってはそれが仕事であると共に趣味であるようであつた。

「ん！？」

だが彼はここで気付いた。目の前にいる貴婦人のことに。そして彼女に目を奪われた。

「何と美しい」

その顔に見入る。だがここでふと気付いた。

「待てよ」

その顔を何処かで見たと思ったのだ。そして考え込んだ。

「そんな筈はない。彼女は今家にいる筈だ」

「御父様」

そこへティズベとクロリンデがやって来た。二人は父に声をかけた。

「どう思う、あの人」

「おそらく御前達と同じだ」

彼はそれに対してそう答えた。

「あまりにも似ておるな」

「そうよね」

「本当にそっくり」

二人もそれに対して頷いた。そしてまた言った。

「けれどここにいる筈はないし」

「そうだ」

マニフィコはその言葉に同意した。

「しかもあれの服といえばどれも灰まみれでボロボロのものばかりだ」

「間違つてもドレスなんか着れないわ」

「そうよね、何かおかしいわ」

「そうだな」

三人はヒソヒソとそう話をしていた。貴婦人はそれを気付かれないように横目で見ている。



## 第二幕その六

「半信半疑ね」

内心そう思うとおかしかった。だがそれは決して顔には出さなかった。ラミールはやはり彼女から目を離さない。そしてアリドーロにそつと囁いた。

「聞きたいことがある」

「はい」

アリドーロはにこりと笑ってそれに応えた。

「まさかあの貴婦人は」

「ええ、わかっておりますよ」

彼はそれに頷いてみせた。

「殿下の思っておられる通りでございます」

「ふむ、そうか」

彼はそれを聞いて頷いた。

「そうだったのか。先生」

「はい」

「よくぞやって下さいました」

「いえいえ」

「彼女が私の……」

「おつと殿下」

だが彼はここでラミールの言葉を遮った。

「まだまだ舞台は続きますぞ。全てが終わってからでも宜しいですよ」

「それもそうか」

「左様です。それまでゆつくりとお楽しみ下さい」

「ではそうさせてもらつよ」

「どうぞ」

そして彼等は戻った。ダンディーニも乗っていた。

「さて、皆さん」

彼は一同に語り掛けていた。

「それでは食卓へ参りましょう。そして心ゆくまで楽しみましょう」

「はい」

「是非とも」

皆それに頷いた。つい先程までマニフィコと一緒に飲んでいた者達でもある。顔は赤くなっているがまだまだ飲み足りないようであった。

「そなた達も一緒にな」

「はい」

ダンディー二はここでその従者達にも声をかけていた。この国では宴は身分を問わず参加してもよいのだ。その方が楽しめるからであると共に王家の懐の広さを宣伝する意味もあった。

「それでは殿下、こちらへ」

「うむ」

彼は従者に案内されながら頷く。そして歩きながら考えていた。

「今日はたっぷりと楽しませてもらうか」

これからの食事や酒のことを考えると自然と口元が緩んできた。

「四人分は食べさせてもらうとするか」

そしてそのまま向かう。後に他の者が従う。

「さて、貴女も」

ここでアリドーロが貴婦人に声をかけた。

「はい」

貴婦人はそれに頷く。そしてアリドーロに案内されて宴の場に向かう。

「先生」

ラミーロはまたアリドーロに声をかけた。アリドーロはそちらに顔を向ける。

「いよいよですね」

「はい」

「これから」

「そう、これから」

彼はラミール口に言つてそう頷く。

「第二幕の幕開けといったところですか、ほほほ」

そう含み笑いをした。そして進む。マニフィコと二人の娘達も当然一緒だ。彼等はまだヒソヒソと話をしていた。

「やはり似ておるな」

「そうよね」

「全くだわ」

三人はそう話し込んでいる。

「けれどここにはいない筈よ」

「そうそう、家に残っているんだから」

「そうじゃよな」

三人はそこで頷き合つた。

「だからあの貴婦人はチエネレントラではない。しかし」

「引つ掛かるわね」

「全く」

「それに嫌な予感もするのう」

マニフィコはここで暗い顔をしてそう言つた。

そう言いながらも一行は宴の場へ向かつた。そしてとりあえずはその宴を楽しむのであつた。だがそれは新たな宴の幕開けに過ぎなかつたのだ。

## 第三幕その一

### 第三幕 謎の姫

宴が終わった後もマニフィコ達は屋敷に帰らず宮殿に留まっていた。そしてその中の一室で話し込んでいた。

「ううむ」

マニフィコはウロウロと歩き回りながら考えていた。顎に手を当てて考える顔をしている。

「御父様、まだ考えておられるの」

「何かおわかり？」

「わからぬな」

彼は娘達にそう答えた。

「やはり似ておる。しかしだ」

「ええ」

「チエネレントラの筈がないし」

それは二人にもわかつていることであった。

「どう考えても有り得ないわよね」

「そうよ。あの娘は今も家にいるのだから」

「そうじゃ。だがあまりにも似過ぎておる」

「それはそうだけれど」

「そして問題はそれだけではないのじゃ」

「それは何でして？」

「わかつておらんのか。鈍いのう」

「何を？」

だがそれでも二人は気付いていないようであった。マニフィコはそんな娘達を見ながら溜息をついて答えた。

「やれやれだ」

そして語りはじめた。

「殿下が御前達ではなくあの女に気が向くのかも知れんのだぞ」

「まさか」

だが二人はそれを笑い飛ばした。

「そんな筈はないわ」

「そう思うのか、本当に」

ここで娘達を問い詰める。そう言われると彼女達も流石にドキッとした。

「ええと」

「あまり自信が……」

「そうじゃろうな。当然じゃ」

マニフィコはそれを聞いてようやく厳しい顔で頷いた。

「わしもあれ程美しい貴婦人を見たことがない」

「ええ」

「勝てると思うか」

二人共それには答えられなかった。マニフィコは言葉を続ける。

「そういうことじゃ。それにしても似ておった」

「そうよねえ」

「仕草まで」

「物を食べる動作や飲む動作までな。どう見てもチェネレントラじや」

「ええ」

「けれどねえ」

「繰り返さなくともよい」

マニフィコはここで娘達が言うことがわかっていたのでそれを止めた。

「言わずともわかっておるわ」

「それなら」

「本当にな。まあ別人じゃろう」

「けれどもし」

「本物だったとしたら」

「だからそれを言っなど言っておろうが」

「はい」

「要は御前達のどちらかが殿下の妃になればよいのだからな」

「それならお任せあれ」

先程の言葉は何処へ行つたのか二人は胸を張ってそれに応えた。

「しかし今」

「御父様」

二人は自信に満ちた顔で父に対して言った。

「殿下はもう私の虜よ」

「いえ、私の」

そして例によつて張り合いはじめた。

「だって私の顔を見て溜息をついて下さっているのですから」

「あら、私には笑顔よ」

「溜息の方が深いわ」

「笑顔の方が喜ばしいわ」

「まあ待て」

言い争いをはじめた娘達を離した。それから話を聞いた。

「つまり二人共に気があるのじゃな」

「つまりそういうことね」

「あとはどちらか選ぶだけかも」

「ほっほっほ」

マニフィコはそれを聞くと上機嫌で笑いだした。

「それはよいことを聞いた」

「そうなの？」

「そうじゃ。つまりわしの娘が殿下の妃になるのは確実じゃからな。

これはよいことじゃ」

「言われてみれば」

「そうなるわね」

「一方が溜息、一方が笑顔」

彼はまた言った。

「どちらにしても幸福が待っておるわ」

「じゃあ私達にも」

「幸福が待っているのね」

「その通りじゃ」

彼は娘達に笑顔でそう答えた。

「今の我が家の惨状は知つていよう」

「はい」

二人はそれを聞くと暗い顔になった。

「借金まみれで家にある物はあらかた質屋行きになっておる。わしの長靴までな」

「そうよね」

「私達のものだってそうだし」

「だがそれももう少しの辛抱、借金は消えてなくなるう」

「そうよね」

「お妃になるのだから」

「逆にわしのところには嘆願書の山が来るであろうな。それこそが我が望み」

話しているうちに機嫌がよくなってきた。そして言葉を続けた。

「よいな、父を見捨てるでないぞ」

「ええ」

「勿論よ、御父様」

「それさえわかっていればよい。ううむ、見える、見えるぞ、誰も彼もがわしのところにやって来るのが」

さらに続ける。

「お妃様にとりなして下さいと。チヨコレートや金貨を持って来てな。話しておきましょう、と答えるともうそこには香水と化粧で武装した貴婦人が立っている。銀貨を持つてな」

取らぬ狸の皮算用に耽っていた。しかし彼はそれには気付かない。「それにもまあ宜しいでしょうと返す。休んで目を開けるとベッドの周りにはわしに頼みごとをする者達の行列が取り囲んでおる。引き立てに罪の許し、就職口、入札に教授になりたいだの鰻の漁、そ

して嘆願書に囲まれるのじゃ。陳情書もあるぞ」

「何て素晴らしい」

「黄金みたい」

「黄金か」

すぐにその言葉に反応した。



## 第三幕その二

「黄金もあるな。メンドリにチヨウザメにワインに絹にドーナツにパイに砂糖漬に金平糖に金貨に銀貨。もうたまりかねてこう叫ぶのだ。もう部屋に入りきらないから止めてくれ、一人にしてくれ、とな。それでもわしは一人にはなれない。いつも側に誰かがいてくれる。何とも楽しいことじゃないか」

「周りに人がいつも」

「何で嬉しいことなのかしら」

「どうやらこの三人は意外と人間が好きなようである。根は寂しがりやなのだろうか。」

「そう、人がいつも側におる。それだけで楽しいことじゃが」

「物が溢れご馳走まで」

「うつつりするわ」

「それも御前達次第じゃぞ。それでは」

「ええ」

「また化粧をなおさなくちゃ」

「髪もだぞ」

「わかってるわ」

「お任せあれ」

こうして娘達は部屋を出た。後にはマニフィコだけが残った。彼はまだ笑っていた。

「勝ったかのう」

暫くして彼も部屋を出た。後には何もなかったが取らぬ狸の皮算用だけが残っていた。その入れ替わりにラミー口達が部屋に入ってきた。

「それで」

「はい」

アリドー口が彼に応える。

「あの娘のことなのですが」

「殿下の仰りたいことはわかっておりますよ」

彼は笑顔でそう答えた。

「それなら話が早い。しかし問題があります」

「何でしょうか」

「ダンディー二のことですが」

「彼が一体」

「どうもあの娘に恋をしているようなのです」

「どうやらそのようですね」

それは彼にもわかっていたことであつた。頷いた。

「先生もそれを察しておられましたか」

「はい」

また頷いた。

「何とかせねば、と思っていたところですよ」

「ふむ」

ラミールもそれを聞いて頷いた。

「御考えがあるようですね」

「ええ、それは」

言おうとしたところで誰かが入つて来た。

「殿下」

「ええ」

二人はそれを受けてカーテンの奥に隠れた。そして入つて来た者達を見た。それはダンディー二とあの貴婦人であつた。ラミールはそれを見て顔を曇らせた。

「やはりな」

「殿下」

しかしここでアリードロが彼を嗜めた。

「状況を見極めるのも手ですぞ」

「わかりました」

彼はそれに従うことにした。そして事の成り行きをカーテンの奥

から見守ることにした。

ダンディー二はそれに気付いてはいない。貴婦人を熱い目で見ながら言葉をかけていた。

「どうかお受けになつて頂けませんか」

「それは出来ません」

貴婦人は頑なな態度でそれを拒絶していた。

「申し訳ありませんが私にはそんな資格は」

「いえ」

だがそれでもダンディー二は引き下がらなかった。

「私はもう貴女しか目に入らないのです」

「しかし」

貴婦人はここでまた言葉を返した。

「私が他の方に恋をしているとしたら」

「うっ」

それを聞くと流石に言葉に詰まった。

「それを私に申し上げられるのですか」

「残念ですが」

彼女は済まなさそうにそう返す。

「わかりました」

彼はそれを聞いて観念した言葉を出した。

「どうやら私と貴女は結ばれる運命にはなかったようです」

「はい」

「残念ですが私は身を引きましょう。ところで」

「はい」

彼はここで質問を変えた。

「それは一体どなたですか。貴女を想いを寄せられておられるのは」

「申し上げても宜しいですか」

「はい」

彼は答えた。

「わかりました」

貴婦人はそれを受けてあらためて口を開いた。そしてダンディー二に対して言った。

「あの従者の方です」

「えっ」

「何と」

それを聞いてダンディー二だけでなくカーテンの奥に隠れていたラミー口達も思わず声をあげた。アリドー口はそれを聞いて会心の笑みを浮かべていた。我が意の通り、といったところであった。

### 第三幕その三

「何ということだ、信じられない」

「見事な運び」

ラミーロとアリドーロはそれぞれそう呟いていた。そして二人は前に出て来た。

「おや」

ダンデーニはそれを見て声をあげた。

「先生、そこにおられたのですか。そして君も」

「はい」

「お話の邪魔かと思ひ姿を隠しておりました」

二人は頭を垂れてそう述べた。貴婦人は話を聞かれていたのを知り顔を真っ赤にしていた。

「貴女に御聞きしたいのですが」

「はい」

ラミーロは貴婦人に対してそう声をかけてきた。

「地位や富はいらないのでしょうか。生憎私の家はあまりお金も地位もありませんが」

「構いません」

貴婦人は静かにそう答えた。

「私にとつての栄華と富は」

「はい」

「美德と愛です」

「何と……」

ラミーロ達はそれを聞いて感嘆の言葉を漏らした。今まで地位や富のことばかり考えているマニフィコ達を見てきたからそれは当然であつた。

「それでは私の妻となつて頂けるのですね」

「それは……」

しかし彼女はここで戸惑いを見せた。

「貴方はまだ私のことをよく御存知ありませんし」

「それはそうですが」

「私は財産ありません。それでも宜しければ」

「財産なぞ求めてはおりません」

ラミールもそう言った。

「私は貴女だけが望みなのですから」

「そうなのですか」

「はい。そして改めて言います」

彼は畏まってそれに答えた。

「すぐにでも貴女を妻に」

「お待ち下さい」

しかし彼女はそれを止めた。

「何故ですか」

「これを」

ここで左手の薬指の指輪を外して彼に与えた。

「こちらに同じ指輪があります」

「はい」

見れば彼女の右手の薬指に同じ指輪があつた。

「私をお捜し下さい。この指輪を。そしてそれが見つけられた時こそ」

「貴女は私の妻に」

「はい」

彼女はそれに答えて頷いた。

「喜んで貴方の妻となりました」

「わかりました。それでは」

「はい。お待ちしておりますね」

こうして彼女は部屋を後にした。そして宮殿も後にしたのであつた。ラミール達がその場に残った。

「どう思う」

ラミーロは二人にまず尋ねた。

「そうですね」

まずはダンディーニがそれに応えた。

「少なくとも私はもう主役ではないようです」

「というと」

「彼女の心が殿下にあるからであります」

「そうか」

だが彼はそれには笑わなかった。続けてアリドーロに問う。

「先生」

「はい」

「先生はこれについてどう思われますか」

「そうですね」

彼は暫し考え込んだ後それに答えた。

「殿下の思われるままに」

「わかりました」

彼は師のその言葉に頷いた。それから言った。

「それでは早速行くとしましょう。思い立ったが吉です」

「はい」

「ダンディーニ」

今度は彼に顔を向けた。

「そういうことだ。今まで御苦労」

「いえいえ」

笑顔で応えてはいるが何処か寂しそうな笑顔であった。

「彼等にも帰ってもらうように」

「わかりました」

「そして」

彼は次々に指示を出す。その動きはかなり機敏なものであった。

「馬車の用意を。わかったね」

「はい」

ダンディーニがまた頷く。

「絶対に彼女を見つけ出さず。彼女が例えユピテルの手の中にあっても」

「また大胆な」

アリドーロがそれを聞いて笑った。ユピテル、すなわちゼウスの好色さは最早言うまでもないことである。なおこの神は実は男色家でもあり驚に変身して美少年をさらったこともある。黄道十二宮の一つ水瓶座の少年である。

「この指輪と愛に誓おう。何としても見つけ出そう」

「殿下」

ここで家臣達が入って来た。そして彼の周りを取り囲む。

「参りましょう、美の女神を手に入れに」

「うむ」

彼は家臣達の言葉に頷いた。

「しかし今は不安だ。冷たい不安が確かに心の中にある」

果たして彼女を見つけ出すことができるのか、そう考えると不安でならなかったのである。

「しかしそれ以上の甘美な希望が心を支配している。今はその希望に従おう」

「殿下の望まれるままに」

「うん。それでは皆行こう」

「はい」

「愛を手に入れに」

そして彼は家臣達と共に部屋を後にした。そして馬車に向かって行った。アリドーロはそれを見て一人微笑んでいた。

「これでよし」

彼にとっては望み通りのシナリオであった。

「後は馬車を男爵家のすぐ側でこかせばいいな。ふむふむ」

そして彼も馬車へ向かった。後にはダンディー二だけが残った。

「何か急に話が終わったなあ」

いきなり王子役が終わり彼は呆然としていた。



「もうちょっと楽しめると思ったんだがなあ。世の中はそうそう上手くはできてはいないということか」

「殿下」

しかしここに世の中がそうそう上手くは出来ていると思っている者がやって来た。

### 第三幕その四

「男爵」

「お願いしたいことがあるのですが」

マニフィコはどういうわけかなり慌てている様子であった。

「何でしょうか」

「私の娘達のことですが」

「はい」

「急に熱が出たようでして」

「それはお気の毒に」

「それでお願ひがあるのです」

「はい」

マニフィコはダンディーニの素っ気無い様子にも一向に気付いてはいなかった。自分のことだけで頭の中が一杯であったからであった。

「僭越ながら」

「はい」

「ご選考を早くお願いしたいのですが」

そう言つて上目遣いにダンディーニを見た。彼の顔色を窺っているのだ。

「宜しいでしょうか」

「そんなことでしたら」

ダンディーニは笑つてそれに応えた。

「もう済んでおりますよ」

「本当ですか!？」

「はい」

飛び上がりんばかりのマニフィコに対してそう答えた。

「もうとつくに」

「それは有り難い。そして」

「はい」

やはりダンディー二の醒めた態度には気付かない。

「それでは娘達のどちらが」

「いずれわかりますよ、すぐにね」

「どちらですか？ティズベですか？クロリンデですか？」

「まあまあ」

彼ははやるマニフィコを嗜めた。

「そんなに焦らないで」

「しかし私は二人の父親ですので」

「秘密です」

「それはわかっておりますが」

「余程心配なようすな」

「はい」

彼はそれを認めた。我慢なぞできる筈もなかった。

「仕方ないですな」

ダンディー二はそれを受けて演技を再開することにした。

「それでは」

「はい」

ダンディー二はここで辺りを見回した。

「誰もいませんな」

「蠅一匹として」

「ならばいいでしょう。それでは」

「はい」

「まあ落ち着いてお話ししましょう。どうぞ」

彼はここでマニフィコに椅子に座るように薦めた。マニフィコもそれに従った。

二人は席に着いた。そして向かい合って話をはじめた。

「これで宜しいですな」

「はい」

ダンディー二は頷いた。

「まあこれからお話することですが」

「はい」

「実に奇妙な話ではありません」

「奇妙な話!？」

「はい」

マニフィコはそう言われて心の中で考えた。どうにもわからなかった。

（それは一体どういうことだ）

ここで彼は妙なことを考えはじめた。

（わしと結婚したとかそういうことではないだろうな）

だがそれは幸いにして違っていた。ダンディーニは言った。

「まずお約束願いたい」

「はい」

「誰にも言いませんな」

「勿論です」

マニフィコは自信を以ってそう答えた。

「私程口の固い者はそうはおりませぬ」

「そうですか」

「はい。私は心に鍵付箱を持っておりますからな」

「それは何よりです」

あまり信用してはいないような口調であつたがマニフィコはそれには気付かなかつた。そしてダンディーニはまた言った。

「それでは言いましょう」

「はい」

「貴方にだけに」

あえてもつたいぶってそう言う。マニフィコは神経を集中させた。

「賢明にして年老いた方は」

「はい」

「常に良き忠告を為さるものです」

「そのようすな」

「そうした方のご令嬢と結婚したならば妻をどのようにして遇するべきでしょうか」

（やった！）

マニフィコはそれを聞いて心の中で小躍りした。

「そうですね」

そして答えに入った。

「厚く遇するべきだと思いますが」

「そう思われますか」

「はい」

彼は笑顔で答えた。

「そしてその賢者も厚遇するべきだと思いますが」

「ふむ」

「賢者を厚遇するのは国の務めでございます」

「それはそうですね」

「はい」

彼は何とか自分の有利な方に話を持って行こうと考えていた。そして話をしていた。

「礼服の召使を三十人程」

「はい」

「馬も百十六頭程」

「はい」

「賓客がひっきりなしに来てもいいような屋敷」

「はい」

「宴の場にお菓子に馬車。多くのものが必要となります」

「また豪華なものになりますな」

「御言葉ですが」

彼はそれでもさらに付け加えてきた。

「それでもまだ足りないと思います」

「といいますと」

「はい」

彼は答えた。

### 第三幕その五

「賢者は国の宝なのですから」

「それはわかっておりますよ」

「ならばいいのですが」

「男爵」

彼はあらためてマニフィコに顔を向けた。

「はい」

「貴方には隠し事はしないです、決して」

「それはわかっております」

「ですが」

「ですが」

「残念なことにお互いかなり離れた場所に立っておりますな」

「そうでしょうか」

「ええ、残念ながら」

彼はそう答えた。

「私は宴を開くことはないのです」

「ご冗談を」

「いやいや」

マニフィコはそれを笑い飛ばしたがダンディーニは否定しなかった。

「常に徒歩で贅沢なものも口にはしません」

「殿下がですか。まさか」

「いや、それが」

彼は言葉を続ける。

「本当なのですよ」

「からかわれているのでしょうか」

「そう思われますか？」

「はい」

マニフィコは答えた。

「殿下、ご冗談が過ぎますぞ」

「これが冗談ではありません」

ダンディーニはピシャリとそう答えた。

「その証拠に私は王子ではありません」

「えっ!？」

「私は影武者なのですから」

「またそのような」

「いえ、それが本当に。私はダンディーニといっています」

彼はここでそう名乗った。

「王子の従者であります。私達に入れ替わっていたのです」

「嘘でしょう?」

「嘘ではありませんよ」

彼はそれを否定した。

「何なら証拠でも。すぐにわかりますよ」

「何と……」

これには流石に閉口してしまった。それでいて開いた口が塞がらなくなってしまうていた。

「殿下の身の周りのお世話をするのが私の仕事です。まあ貴族なのは確かですがね」

「何としたことじゃ。わしともあろう者が」

マニフィコはようやく口を閉じてそう言った。

「まんまと騙されておったわ」

「まあまあ」

「まあまあではありませんぞ」

彼はダンディーニに対してそう言い返した。

「殿下も貴方も何を考えてそのような」

「それはすぐにおわかりになると思いますよ」

彼はそう言葉を返した。

「すぐにね」



そして言葉を続けた。

「屋敷に帰られれば」

「いや」

だがマニフィコはここで首を横に振った。

「帰りはしませぬぞ」

「ここはお引取りを」

「何故ですか」

「それもすぐにおわかりになることです」

「言っておきますが」

「はい」

「私も貴族です」

「ええ、存じておりますよ」

ダンディーニはそれを聞いても臆してはいなかった。

「私もそうですから」

「それではわかりだと思いますが」

「はい」

「この屈辱忘れはしませぬぞ」

「まあ御気を鎮められて」

「そうですな」

苦虫を噛み潰した様な顔でそれに応える。

「貴族は分別も備えているものですから」

「はい」

「ここは下がらせてもらいましょう。ただし」

「何でしょう」

マニフィコに声をかけた。彼は席を立てて振り向いて答えた。

「このことは忘れませんからな」

「はい」

それを聞き流した。そしてマニフィコを見送った。

「さてと」

彼はそれを見届けると立ち上がった。

「それではこっちも行くとするか」

そして彼も部屋を後にした。入れ替わりにアリドローロが部屋に戻ってきた。

「いかんいかん」

彼は部屋の中で何かを探していた。

「マントを忘れておったわ」

彼はカーテンの裏を探した。そしてマントを取り出しそれを身に纏った。

「これでよし。ふむ」

身に纏ってから辺りを見回した。

「ダンディーニも行ったかな。ならばよい」

それを確認して満足したようであった。

「彼の同行は殿下も望んでおられるからな。さて」

彼は部屋を後にした。扉に手をかけてから呟いた。

「私も行かねばな。早く追いつかねば」

それから部屋を出た。部屋の灯りはそのままであったがやがて従者達が来てそれを消した。そして後には暗闇だけが残った。

## 第四幕その一

### 第四幕 明かされた真実

マニフィコはダンディーニと別れた後娘達を連れて足早に宮殿を後にした。そして一路自分の屋敷に向かって行った。彼は馬車の中で憮然としていた。

「御父様、どうしたの？」

ティズベが不機嫌そうな顔の父に尋ねた。

「何だか急に機嫌が悪くなられたようだけれど」

「何でもない」

彼は憮然とした声でそれに答えた。

「だから気にするな。よいな」

「え、ええ」

彼女はそれに頷くしかなかった。クロリンデもそれは同じであった。

「それよりもだ」

「はい」

マニフィコはここで話を変えてきた。

「あの娘はどうしているかだ」

「あの娘って？」

二人はそれを聞いて首を傾げた。

「一体誰のこと？」

「わかっておらんな、チエネレントラのことだ」

マニフィコは要領を得ない娘達に少し怒りを覚えながら言った。

「今何処にいるかだ」

「そんなの決まってるわ」

「ねえ」

二人はそう言って顔を見合わせた。

「確かにな」

実はマニフィコにもそれはわかっていた。

「しかし宮殿のあの貴婦人」

彼はそこでまたあの麗しい貴婦人を思い出した。

「あまりにも似ておった」

「そうだけれど」

「まさか……」

娘達はそれについてはあまり信じてはいなかった。有り得ないことだと思っていたのだ。

「御父様、考え過ぎよ」

「そうそう」

「本当にそう思うか？」

娘達にそう問うた。

「ええ」

「普通に考えて有り得ないわ。だって」

二人は言葉を続けた。

「あの娘は今うちにいるのよ」

「そして家事をしている筈だわ」

「そうだな」

マニフィコは少し憮然とした顔でそれに頷いた。

「だがそれが果たして本当なのかどうか」

「心配性ね」

「大丈夫よ」

「ううむ」

それでも彼の不安は消えなかった。そうこう話をしている間に屋敷に着いた。

「こちらでしたね」

前から御者の声がした。

「うむ」

マニフィコはそれに応えた。

「ここじゃ。御苦労であつた」

「いえいえ」

マニフィコは御者にチップを渡した。金貨二枚であった。

「二枚ですか」

「うむ」

彼は驚く御者に笑顔で応えた。

「済まぬな。少ないか」

「いえ、そのような」

御者は一枚だと考えていたのだ。だが彼は二枚出してきたのだ。それに驚いていたのだ。

「わし等は三人だったな。よし」

マニフィコはここで懷から金貨をもう一枚出した。そして御者に手渡した。

「これでどうじゃ」

「どうも」

彼はそれを受け取って頭を下げた。そして礼を述べた。

「有り難うございます」

「礼はよいぞ」

彼は鷹揚にそう応えた。

「仕事に対する当然の報酬じゃからな。さて」

そして娘達に顔を向けた。

「この働き者に礼を言うようにな」

「ええ」

「有り難う」

「こりやどうも」

彼は上機嫌でその礼に応えた。そして三人はそれを受けた後で馬車を降した。そして屋敷の前に出た。

「さて」

マニフィコは馬車が消えると自分の屋敷の門の前で一呼吸置いた。

「行くぞ」

「ええ」

「わかつたわ」

何故か娘達もそれに乗っていた。そして二人は何故か自分の家に帰るのに身構えていた。そして屋敷に入った。

「只今」

「お帰りなさい」

すぐに返事が返って来た。それはあの娘のものであった。

「おや」

「ほら」

「やっぱりいるじゃない」

二人の娘は驚いた顔をする父に対してそう言った。

「考え過ぎよ、御父様は」

「確かに似ているけれどね」

「似ている？」

チエネレントラはそれを聞いて不思議そうな顔を作った。

「何かあったのですか？」

「あ、何でもないわよ」

「いいからお仕事を続けてね」

「はい」

チエネレントラはそれを受けて仕事を続けた。見れば掃除をしている。

「昔一人の王様がおられました」

いつものように唄いながら掃除をしている。

「一人でいることに飽きられてお姫様を探すことにしました」

「ちよつとチエネレントラ」

それを聞いたティズベが不満そうな顔で彼女に声をかけた。

「何か」

「いつも言っけれど他に曲ないの？」

「そうよ」

クロリントデも続いた。

「いつもその曲じゃない。他の曲も聴かせてよ」

「そう言われても」

「ああ、もういいわ」

二人はそれを聴いて匙を投げたように言った。

「どのみち貴女にはその唄は合っているんだし」

「声域もね。それを間違えると大変なことになるわよ」

「はい」

そう言われてすこし戸惑っていた。

## 第四幕その二

「貴女の声は低いけれど高めなんだから」

「低いけれど……高め」

「そうよ」

二人はそこで答えた。

「貴女の声はね、低いのよ。けれどその低さにも程度があつてね」

「はい」

「その中では高い方なの。だから唄う歌には気をつけなさい。いいわね」

「わかりました」

彼女はわからないままそれに頷いた。姉達はそれを見た後で階段に足をかけた。

「それじゃあね。これで休むわ」

「わしもじゃ」

マニフィコも自室に向かった。

「朝になつたら起こしてくれ」

「ご夕食は」

「ああ、いい」

「私も」

「私もいいわ」

三人はそれぞれそう答えた。

「宮殿で腹一杯食べてきたからな」

「美味しかったわよ」

「残念ね、行けなくて」

「いえ」

だがチエネレントラはそう嫌味を言われても態度を変えなかった。

「私は私で」

「何かあつたのか!？」



マニフィコがすぐに反応した。彼女はそれを見てすぐに見せようとした笑みを消した。そのうえで返答した。

「満足するだけ食べられましたし」

「何だ」

彼はそれを聞いて安堵した顔をした。

「何事かと思つたわい」

「何かあつたのですか？」

「いいや」

今度は不機嫌な物腰で手を振った。

「何もない。気にするな、よいな」

「はい」

「少なくとも御前には何も関係のないことじゃ。よいな」

「わかりました」

「わかればよい。さて」

彼は付けていた鬘を外した。だがその中の髪型も鬘と大して変わりはなかった。

「休むとしよう。それではな」

「お休みなさいませ」

チェネレントラは召使の様に挨拶をした。マニフィコはそんな彼女に対して言った。

「明日の朝は玉葱のスープにしてくれ。よいな」

「わかりました」

ここで外で雷鳴が轟いた。マニフィコはそれを聞いて顔を顰めさせた。

「何かよからぬ予感がするのう」

すると遠くから何かが倒れて壊れる音が聴こえてきた。

「そらきた」

「何か倒れたのでしょうか」

「扉を開けるでないぞ」

彼はここでチェネレントラにそう注意した。

「外は嵐じゃからな」

「はい」

聴けば外はかなりの嵐であつた。風と雨の音が聴こえてくる。屋敷に激しく打ちつけていた。

「雨が入つてはかなわんからな。それでは寝よう」

そしてようやく部屋に入ろうとしたその時であつた。扉を叩く音がした。

「あら、誰かしら」

「待て、魔物かも知れぬぞ」

チェネレントラは扉に向かった。マニフィコはそれを止めようとしたが間に合わなかつた。彼女は扉を開けた。するとそこにはダンディーニがいた。

「殿下」

「殿下ではないわ」

マニフィコはチェネレントラの後ろで忌々しげにそう言った。

「彼は偽者なのじゃ」

「そうですの!？」

「ははは」

ダンディーニはそれに笑いながら答えた。

「確かに私は偽者でした」

「何と」

「それみろ」

マニフィコは不機嫌そのものの顔で彼等の側にやって来た。そしてこう言った。

「一体何の用なのですかな」

「何かありましたの」

「嵐で家が壊れたの？」

上にいる娘達も出て来た。そして下に降りて来た。

「あつ」

そしてダンディーニを見た。二人ももう彼のことは知っていた。

一応頭は下げたがそれだけであった。恭しく礼をする気にはもうなれなかった。

「やあ、どうも」

「何か御用ですか？」

二人はあからさまに嫌そうな顔でダンディー二を見た。

「いや、何」

彼はそれをおものともせず余裕を以って応えていた。

「実はトラブルが起こりまして」

「ほう」

マニフィコは何かを探るような顔で彼を見ていた。

「私も今日はえらいトラブルに巻き込まれましたぞ」

「ははは、そうでしたか」

「他ならぬどなたかのせいだね。まあそれはいいことです」

「はい」

「それで何か起こったのですかな」

「実は殿下がこの近くにおられました」

「本当ですか!？」

それを聞くとやはり普通ではいらなかった。マニフィコと二人の娘達は声をあげた。

「はい、馬車で移動されていて」

「それで」

「その馬車が転倒してしまったのです。それでご助力を願いたいのですが」

「そういうことなら」

マニフィコは胸をドンと叩いてそれに答えた。

### 第四幕その三

「我が命、殿下に捧げるつもりです」

「それは有り難い」

それを聞いてダンディーニは笑顔で頷いた。

「チェネレントラ」

マニフィコはここでチェネレントラに顔を向けた。

「はい」

「温かいものの用意を」

「わかりました」

彼女は台所に入った。マニフィコはそれを見届けてからダンディーニに顔を戻した。

「そして殿下はどちらに」

「はい」

ダンディーニは頷いた。それから扉の前の道を開けた。そこから一人の貴公子が姿を現わした。

「ここがマニフィコ男爵のお屋敷ですな」

「はい、殿下」

ダンディーニはラミーロにそう答えた。

「そしてこちらにおられるのが」

「この屋敷の主人でございます。そしてここにいるのが娘達でございます」

「はじめまして」

二人は恭しく頭を垂れた。

「顔をお上げ下さい」

ラミーロは三人に対してそう言った。三人はそれに従い顔を上げた。

「殿下、ご無事ですか」

マニフィコはまず彼にそう声をかけた。

「心配はいりません」

ラミー口は微笑んでそれに答えた。

「馬車がこけただけです。誰も怪我はしませんでした」

「そうですか。それは何より」

「別の馬車がすぐに来ますし。それまでの間こちらにいても宜しいでしょう」

「是非とも」

マニフィコは笑顔でそれに応えた。そして恭しくこう言った。

「しかしお身体が冷えられたでしょう」

「いえ、別に。お構いなく」

「そういうわけにはいきません。チェネレントラ」

台所の方に声をかけた。

「もう出来ているか」

「はい」

台所の方から声がした。そしてコーヒを持って来たチェネレントラがやって来た。

「むっ」

彼女を見たラミー口の顔色が変わった。それはチェネレントラもであった。

「まさか」

「そんな」

二人は互いの顔を見て呆然となった。あやうくコーヒを落としそうになる程であった。

「おい、危ない」

それに驚いたマニフィコが慌てて声をかけた。

「あっ」

すんでのところでそれに気付いた。チェネレントラはコーヒを戻した。

「一体どうしたんだ」

「あ、何でもありません」

「いや」

慌てて取り繕うチェネントラに対してラミーロが前に出た。

「何かあるのですよ、あしからず」

「何か!？」

「はい。ダンディーニ」

ラミーロはここでダンディーニに声をかけた。

「はい」

「ちよつとコーヒーを持っていてくれ」

「わかりました。お嬢様」

「はい」

ダンディーニはここでチェネントラに声をかけてきた。そして前に進み出た。

「ちよつとそのコーヒーを拝借」

「わかりました」

そしてコーヒーを受け取った。これでチェネントラは自由となった。ラミーロが彼女の前に出て来た。

「まさか……」

「そう、そのまさかなのです」

ラミーロは彼女ににこりと笑って微笑んだ。だがチェネントラの顔は蒼白となっていた。その場から去ろうとした。

「そんな……」

「お待ち下さい」

だがラミーロはそれを止めた。そして彼女に対して言った。

「あの約束、覚えておられますね」

「はい」

彼女はそれに頷くしかなかった。それで流れは決していた。

「それではお手を」

ラミーロの言うままに手を差し出す。彼はそこに指輪をはめた。それで全ては決まった。

「これでよし」

「全ては」

アリドーロはそれを見て会心の笑みを浮かべた。そして二人の間に来てこう言った。

「只今殿下のお妃が決まりました」

「えっ!？」

それを聞いてマニフィコ達はやや場違いとも思える声を出した。

「あの、今何と」

「ですからお妃が決まりましたと」

アリドーロは済ました様子でそう答えた。

「冗談ですよ」

「いいえ」

その言葉に首を横に振った。

「まさか」

「またまたそんな」

「私は嘘は申しませんよ」

「それでは私達は」

「残念でした」

ティズベとクロリンデにはそう答えた。

#### 第四幕その四

「殿下のお妃様はこの方に決まっていたのです」

「何時の間に」

「貴女達の知らない間にです」

「私も知りませんでした」

「男爵」

まだ話がわかっていないマニフィコに対して語った。

「時間は一つではないのです」

「といいますと」

「私は今ここに時計を持っておりますね」

「はい」

ここで彼は懷から懷中時計を取り出してマニフィコに見せた。

「そして貴方も持つておられますね」

「ええ、こちらに」

マニフィコもそれに習つて時計を取り出した。

「持つておりますよ」

「はい。そしてこちらにもありますね」

今度は屋敷の壁にかけてある時計を指差した。古い時計であつた。

「はい」

「そういうことです。時間は全ての人がそれぞれ持つて居るのです。おわかりになれましたか」

「ううむ」

そう言われてもまだもう一つわからなかつた。マニフィコは首を傾げていた。

「わかつたようなわからないような」

「まあおいおいわかりになればいいことです。さて」

彼は話を元に戻してきた。

「何はともあれこれで殿下はお妃を迎えられることになったわけ」



す」

「それはお待ち下さい」

マニフィコは慌ててアリドー口を止めようとす。

「何故ですか」

「この娘ですが」

「はい」

「女中ですよ。それがお妃には」

「おや、おかしいですな」

アリドー口はそれを聞いておかしそうに笑った。

「確かこの屋敷には三人の娘がいた筈ですが」

「死んだと申し上げましたが」

「死亡通知は届いておりませんよ」

「うつ……」

そこまで調べられているとなると事情が違っていた。マニフィコは言葉を止めた。

「彼女は確か貴方の二番目の奥方の連れ子でしたな」

「はい……」

ここまできてシラを切れる程図太い人間ではなかった。彼は止むを得なくそれを認めた。

「それでは男爵家の者であることには変わりありません。それではそちらの御二人と同じ資格があるのです」

「確かにそうですが」

「まだ何か仰りたいことは」

「いえ」

流石にこれには参ってしまった。もう何も言えなかった。

「それでは宜しいですな」

「はい」

「じゃあ私達は」

「とんだくたびれもうけというわけですね」

「ははは、人生は長いです。そういうこともありますぞ」

アリドーロはそう言つて二人を慰めた。

「まあ少しは人生の勉強になったことでしょう」

「高い授業料だったわ」

「こんな高いのははじめてよ」

「払わせたのは私ですがな」

ここでダンディーニが出て来て笑顔でそう言った。二人はそれを見て口を尖らせた。

「そうよ、上手く騙されたわよ」

「貴方役者になったら。成功するわよ」

「生憎私は今の仕事が入っておりまして」

彼は二人にそうすげなく返した。

「他の仕事に就く気はありません」

「フン」

「調子がいいんだから」

「ははは」

ラミーロはその一部始終を見ていた。そして話が終わるのを見届けてから静かにこう言った。

「もういいか」

「あ、はい」

これに一同畏まった。彼はそれを見届けるとまた口を開いた。

「それでは今ここに宣言する」

「はい」

「私はこの女性を生涯の伴侶とする。よいな」

「是非ともそうなさいません」

「殿下とお妃に神の御加護があらんことを」

「うむ」

アリドーロとダンディーニの祝辞に微笑みを以って答える。そして今度はチェネレントラに顔を向けた。

「宜しいですか」

「お待ち下さい」

だがそれでも彼女は首を縦に振ろうとはしなかった。

「どうしてですか。約束は果たしたというのに」

「しかし」

「まだ何かあるのですか」

「はい」

彼女は頷いた。そしてマニフィコ達に顔を向けた。

「あの方達が」

「あの者達がどうしたのですか」

ラミーロはマニフィコ達に顔を向けて不思議そうな顔をした。

「彼等が貴女に冷たくしていたことは私も知っておりますよ」

「いいえ」

だがチェネレントラはそれには首を横に振った。

「私はそうは思ってはおりません」

「何故ですか」

それを聞いてさらに不思議に思った。

「今までのことを最もよく御存知なのは貴女のように」

「確かにそうです」

それは彼女も認めた。

「けれどだからこそ、です」

「だからこそ」

「そうです。私はあの方達のことをよく知っているつもりです」

「ふむ」

アリドローはそれを見てまた微笑んだ。

「私が思っていた以上だな。よくできた方だ」

次にマニフィコ達に顔を向ける。見れば三人は暗い顔をしてヒソヒソと話をしていた。

「参ったことになったな」

「そうね」

「今まで冷たくしてきたし。これからどうなるのかしら」

「これかのう」

マニフィコは両手で自分の首を締める動作を試みせた。

「お妃様を怒らせた咎で」

「そんな……」

「いや、きっとそうなるぞ」

マニフィコはそう言いながら暗い顔をしたままであった。

「今までのことを思うとな」

「そうよね」

娘達もそれを聞くと暗澹たる気持ちになってきた。

「あれだけのことをしてきたのだから」

「きつとね……」

「うむ」

「お困りのようすな」

そこへアリドーロが声をかけてきた。

## 第四幕その五

「恐ろしいですか、今の状況が」

「ええ」

「正直に申し上げますと」

三人はそれぞれ答えた。

「私達は縛り首でしようか」

「それで済むかしら」

「八つ裂きかも知れんもの」

「八つ裂き……」

娘達はそれを聞いて顔をさらに青くさせた。恐怖に心が支配されてしまっていた。

「そんな……」

「よくて車輪刑」

車輪で両手両脚を砕く処刑である。欧州では比較的ポピュラーな刑罰であった。

「いや、逆さ鋸引きかも」

「止めてよ……」

「そんなの聞いていられないわ」

「しかしわし等の運命はもう……」

マニフィコもそれは同じであった。やはり彼等は死の恐怖に怯えていたのだ。

「大丈夫ですよ」

しかしアリドーロはここでそう言って三人を安心させようとした。だが彼等はそれでも暗い顔のままであった。

「貴方は何も知らないのです」

マニフィコはそう語った。

「私達と彼女のことを」

「知っておりますよ」

だが彼はあえてそう答えた。

「知っているからこそ今ここにいるのです」

「そうですか」

「御氣遣いは有り難いですけれど」

「暗くはならないように」

彼はそう言つて三人を嗜めた。

「暗い気持ちだと何事も駄目になってしまいますぞ」

「もう駄目になっております」

「はい」

「私達を待つているのは絶望だけですから」

「ふむ、確かにそうですね」

アリドーロはその言葉に頷いた。

「今のままでは貴方達を待つているのは絶望だけです」

「はい」

「しかしそれを変えることも可能なので、希望に」

「またそのような」

「私達も分別はあるつもりです。大人しく裁きは受けるつもりです」

「落ちぶれたとはいえ貴族です」

「全てはお妃様次第だとしても」

「えっ」

三人はそれを聞いて顔を上げた。そしてアリドーロに顔を向けた。

「あの娘次第ということは」

「そのままです」

アリドーロはにこりと笑つて答えた。

「全てはお妃様の御心次第です」

「では駄目ではありませんか」

「それは私達にもわかりますわ」

「そうでしょうか、果たして」

アリドーロは思わせぶりにそう言った。

「本当にそう思われますか」

「何を今更」

マニフィコはそう答えて首を横に振った。

「どうせ私達は」

「あの娘、いえお妃様のことは私達が最もよく知っておりますわ。  
だからこそ」

「私達のことわかります」

「深刻に考えておられますな」

「どうして深刻でいらすにねれましよう」

三人はそう返した。

「これから処刑が待っているというのに」

「私はそうは思いません」

「またそう仰るが」

「お妃様は」

彼は話しはじめた。

「心優しい方です。それは私が保証します」

「先生が」

「はい」

彼はまたもやにこりと笑ってそれに応えた。

「私が最初に貴方達の屋敷にお邪魔した時のことは覚えておられま  
すね」

「ええ」

「勿論です」

ティズベとクロリンデがそれに頷いた。

「あの時はどうも」

「はい」

二人はここでアードーロのやんわりとした嫌味を甘んじて受ける  
ことにした。後悔していた故であった。

「あの時貴女方は私には何も下さいませんでしたね」

「申し訳ありません」

「本当にものがなかったもので」

二人はそう言つて頭を下げた。

「それはわかつておりました」

「では何故」

「お妃様はそんな中で私に恵んで下さったのです、パンとコーヒーを」

「何処にそんなものが」

「ご自身のお食事から。ささやかなものでしたが」

「そうだったの」

「あの娘だつてろくに食べていないのに」

「そう、その中から私に恵んで下さったのです。何と心の優しい方でしょうか」

「けれど私達は優しくはなかった」

ティズベはそう答えた。

「そんな者に恵みは与えられないわ」

「それは違います」

だがアリドーロはまたそう答えて二人を宥めた。

「よろしいですか」

「はい」

「貴方達がとられるべき道は二つあります」

「二つですか」

「そうです。このまま縛り首の恐怖に怯えるか、若しくはあの方に慈悲を乞うか、です。どちらに致しますか」

「そう言われても」

三人はそう言つて口籠もった。

「私達は許されはしないでしようし」

「彼女も許すつもりなぞないでしょう」

「そう思われているのですね」

「はい」

三人は項垂れてそう答えた。

「そうとしか思われません」



「縛り首になつても宜しいのですかな」

「それは……」

力なく首を横に振った。

「そうでしょう。そうだと思います。それでは駄目元でやってみてはどうですか」

「許しを乞うのですか」

「はい」

アリドーロはそう答えて頷いた。

「それしかありませんぞ」

「わかりました」

マニフィコはそれに応えた。

「それではやってみます」

「御父様」

「よいか」

彼は娘達に対して語りはじめた。

「よしんばわしが縛り首になるとしてもだ」

「はい」

「御前達の命だけは救つてみせるからな。あの娘が一番憎んでいるのはおそらくわしじゃから」

「いえ、私かも」

「そんな、私よ」

「どうやらどうしようもない連中ではなかったらしいな」

アリドーロはそれを見て呟いた。

「ならばよし。それでは最後の舞台に向かおう」

彼はその場を後にした。三人だけが残っていた。彼等はまだ色々話をしていた。

「それではよいな」

最後にマニフィコがそう念を押した。

「ええ」

「それしかないわね、やっぱり」

娘達が頷く。それを受けてマニフィコも決意の色を固めた。

「では決まりだ」

「はい」

そして三人もその場を後にした。こうして最後の舞台への準備は全て整ったのであった。

## 第五幕その一

### 第五幕 大団円

それから暫く経ちラミーロとチエネレントラの婚礼の儀が執り行われることとなった。指輪が戻ったあの日以来チエネレントラは王宮に留まり婚礼の準備に余念がなかった。そしてその日が遂にやってきたのだ。

「王子様万歳！お妃様万歳！」

周りの祝う声が木霊する。その中を着飾った二人が進む。

「妃よ」

ラミーロはうつとりとした顔で横にいる彼女を見た。

「殿下」

チエネレントラはそれに応えて笑みを彼に返した。清楚な、それでいて優美な笑みであった。

「まだ信じられません、このようなことが起こるとは」

「夢ではないんだ」

ラミーロは優しい声でそう応えた。

「その証拠に……見るんだ」

彼は彼女の左手をとってそれを彼女自身に見せた。

「この指輪を。今それは貴女の手にある」

「はい」

「これが何よりの証拠だ。今貴女は私の妻となるのだ」

「夢ではなく本当に」

「そうだ」

「私が殿下のお妃に……。何ということでしょう」

チエネレントラは恍惚とした顔でそう呟いた。

「今まで灰にまみれていたというのに」

二人はそのままゆつくりと進む。皆二人を祝福していた。その中にあの三人もいた。

「あの……」

ティズベが何か言おうとして止めた。三人はマニフィコを中心に俯いて立っていた。

「何か」

チエネレントラは彼等にその優美な微笑みを見せて応えた。

「いえ、何も」

ティズベはその言葉を打ち消した。そしてまた俯いた。

「そうですか」

チエネレントラはそれを聞いて寂しそうに応えた。

「まだ娘と、妹と呼んでは下さいませんのね」

「私達にそのような資格はありません」

マニフィコは首を横に振ってそう返事を返した。

「今までのことを思えば」

「今までのことをですか」

「はい」

三人はそれに答えた。

「それでは是非娘と、妹と呼んで下さいませ」

「えっ!？」

「まさか」

「やはりな」

アリドーロはそれを見てにこりと笑った。見れば彼だけでなくダ  
ンディーニもいた。

「今まで私達は貴方達と共に暮らしておりまして」

「使用人としてこき使って」

「歌を下手だと言って」

「それはもう過ぎたことです」

チエネレントラは笑ってそう言った。

「それよりも私はこれからのことを考えたいのです」

「これからのこと」

「妃よ、それは」

「はい」

ラミー口もそれを聞いて彼女に問うた。彼女はまた微笑んでそれに応えた。

「私は玉座へと昇ります」

「はい」

「それで私達を……」

三人はそう呟きながら震えていた。だがそれでもチエネレントラはそれを宥めた。

「そんなことはしませんわ」

「そんな馬鹿な」

「今までのことを思えば復讐するのが当然よ」

「そうよね、それが人間ですもの」

「復讐ですか」

チエネレントラはそれを聞いてまた笑った。

「復讐されることを望まれるのですか？」

「貴女がそう望まれるのなら」

三人はそう答えた。

「慎んでそれを受けましょう」

「わかりました」

チエネレントラはそれを聞いて満足そうに頷いた。

「それでは復讐を致しましょう」

「はい……」

「覚悟はできております」

三人は頭を垂れた。チエネレントラはその三人の前に歩み寄った。そしてその両手を広げた。その手で彼等を包み込んだ。

「え……」

包み込まれた彼等は驚いた顔でその手を見た。白く長い絹の手袋で包まれた、清らかな手であった。

「これが私の復讐です」

チエネレントラは優美な笑みを保ったままそう言った。

「私はこれから、そして何時までも貴方達と家族でいたいのです。宜しいでしょうか」

「はい……」

三人はその手の中で頷いた。そして赤い絨毯に一粒の真珠を落とした。それで全てが許された。

「私は確かに今までは恵まれているとは言えませんでした」

チェネレントラは三人から離れるとそう語りはじめた。

## 第五幕その二

「それに耐える日々が続きました。……けれどそれはほんの一瞬のことでした」

「そう、ほんの一瞬のことでした」

アリドーロがやって来てそう言った。

「全ての苦しみは一瞬のことなのです」

「先生がいつも言われていることですね」

「はい」

彼はラミーロにそう答えた。

「しかしそれに耐えることこそが肝心なのです。そうですね、お妃様」

「ええ、その通りだと思います」

優雅に微笑んでそう答える。

「素晴らしい魔法の力で花の歳に私は生まれ変わりました。まるで稲妻の様に」

「それに立ち会えたのは何という幸運だったのでしょうか」

ダンディーニもやって来た。

「私達も共に生まれ変わることができましたから」

「私もですか？」

マニフィコが小さな声でアリドーロに尋ねた。

「私達もでしょうか」

ティズベとクロリンデもであった。彼等は不安そうな顔でアリドーロに尋ねていた。

「勿論ですよ」

彼は笑顔で三人にそう答えた。

「ですから今この場におられるのです。それに先程のあれです」

「あれですか」

「はい」

彼はここで先程の真珠について言及した。

「あれこそが貴方達の改心の証。これで貴方達はお妃様と本当の意味で家族となったのです」

「本当の意味で」

「はい」

彼は答えた。

「それは貴方達御自身が最もよくわかっておられると思いますよ」

「確かに」

三人はそれを聞いて頷いた。

「そう言われればそうだと思います」

「そうですね」

「では私達も貴方達の中に入って宜しいでしょうか。お妃様をお祝いする為に」

「当然です」

アリドーロは我が意を得たとばかりに笑みを作ってそれに応えた。  
「その為に貴方達はおられるのですから」

「ならば」

三人もチェネレントラの周りに来た。そして彼女を取り囲んだ。

「これから宜しく願います」

「喜んで」

「それでは皆さん」

アリドーロがその場にいて一同に対して言った。

「これから心ゆくまで祝うとしましょう。これから続く永遠の幸せを祝福する為に」

「はい！」

シャンパンの栓が放たれた。そしてそれで部屋も人も濡らす。

「うわっ！」

ラミーロにもチェネレントラにも、そしてマニフィコ達にもそれは放たれた。そして皆喜びの美酒を味わうのであった。



チエネレントラ

完

2005・3・26

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3460f/>

---

チェネレントラ

2011年4月28日00時35分発行